

第3章 京都大学病院構内AG20・AF20区の発掘調査

千葉 豊

1 調査の概要

調査地点は、吉田山西南麓、京都大学医学部附属病院構内の東南部にあたる。ここに中央診療棟の取り壊し工事等が計画されたため、隣接地点における従来の調査結果および既存建物の位置などを勘案して、2箇所の調査区（AG20区東調査区・西調査区）を設定して発掘調査を実施した。さらに調査期間中に、本調査区の南に隣接する地点（AF20区）に、MRI-CT装置棟の新営が計画されたため、AG20区の調査と併行して発掘調査をおこなった（図版1-239・240、図42）。現地調査は1995年12月1日に開始し、1996年5月31日に終了した。調査面積は、総計2540m²である。

本調査区一帯は、現在の鴨川東縁部にあたり、先史時代には高野川系旧流路、白川系旧流路が流入する低地部を形成していた。本格的な開発は古代末以降で、六勝寺を中心に展開した白川街区の北辺にあたり、康和5（1103）年に僧増誉が創始した聖護院とその鎮守社熊野社の所領に含まれていた。室町時代には聖護院村が成立し、近世後半には蔬菜類を主産品とする都市近郊農村として栄えた場所である。周辺の既往の調査では、近世の池や幕末の蓮月焼を多量に出土した土坑（141地点）、縄文時代の旧流路、古代の土坑、中世の井戸・溝、近世の土取穴（154・155・191地点）などがみつかっており、今回の調査でもこうした時代の資料が得られるものと予想された。

発掘調査の結果、縄文・弥生時代の旧流路、中世の井戸・土坑、近世の池・溝・旧流路などを検出した。出土遺物は、縄文時代から江戸時代に及び整理箱で214箱を数える。これらは、この地における土地利用の変遷を明らかにする基礎資料として活用できよう。とりわけ近世の溝から多量に出土した17世紀の土器・陶磁器は、京都大学構内遺跡では従来ほとんどみられなかった資料として重要である。また今回の調査でも多量に出土した蓮月焼は、その実態を知るうえで、貴重な資料となるであろう。

なお現地調査は、千葉豊と吉田広が担当し、磯谷敦子・柴垣理恵子・下坂澄子・曾根茂・松村知也・下垣仁志・稲増崇・吉田崇・飛知和東子・尾上忍が測量などの作業にあたった。また出土資料の整理は千葉が担当し、磯谷・下坂・曾根・松村・下垣・稲増・飛知和・尾上・木村圭祐・梅川須恵が実測・復元などの作業をおこなった。

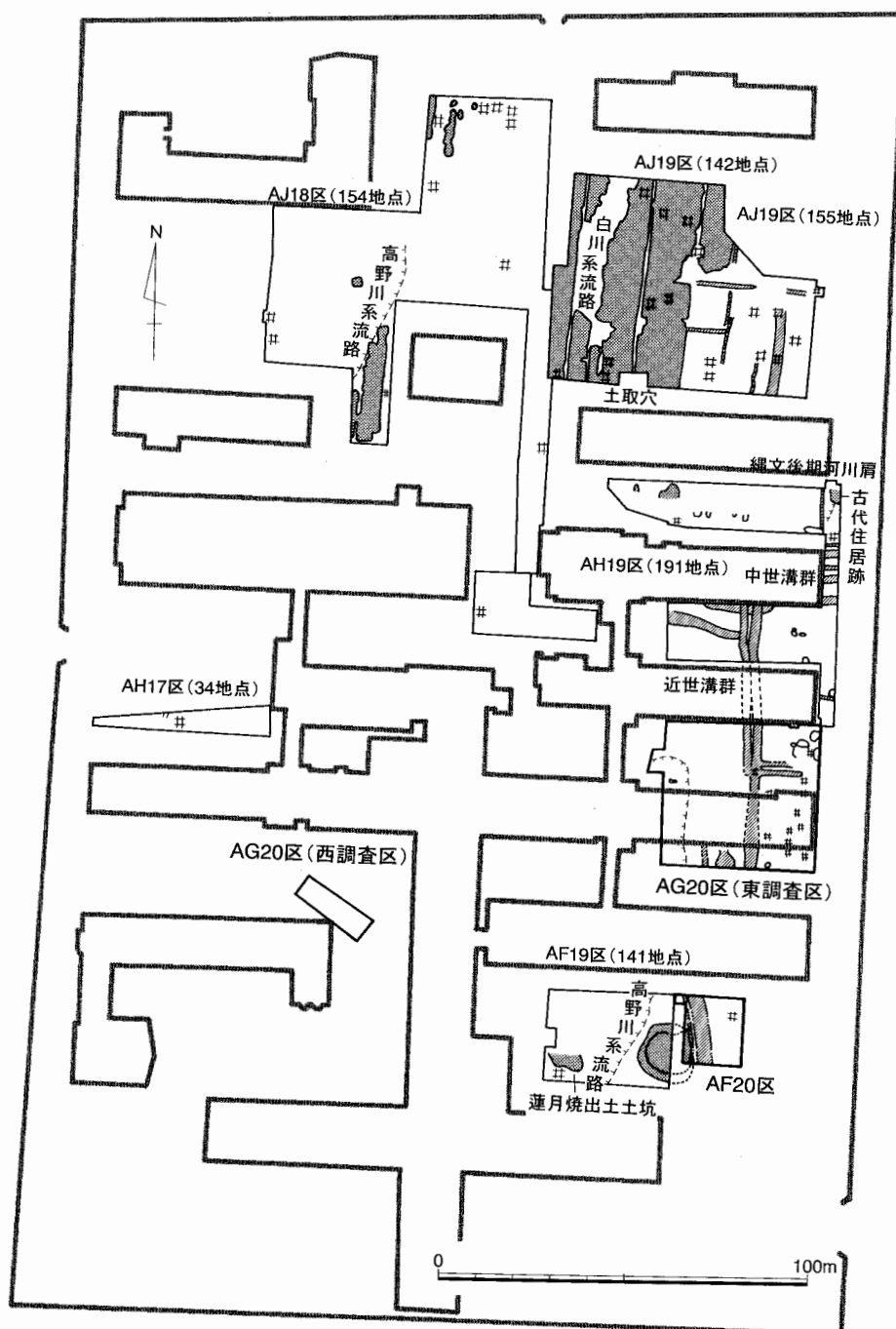


図42 本調査区の位置と病院東構内の遺跡 縮尺1/2000

2 AG20区の遺構と遺物

AG20区の調査では、東調査区と西調査区の2箇所の調査区を設定して調査を進めた。西調査区は近現代の管路により、遺跡のほとんどが破壊されており、中世の遺物包含層をごく一部検出したにとどまった。ここでは、おもに東調査区の成果について詳述する。

(1) 層 位 (図43)

現地表の標高は、50.0m前後で平坦である。基本的な堆積は、上から順に表土(第1層)、灰褐色土(第2層)、茶褐色砂質土(第3層)、黄褐色粗砂(第4層)、黄灰色粘土(第5層)、黒色土(第6層)、淡褐色砂質土(第7層)、黄灰色シルト(第8層)、赤褐色砂礫(第9層)である。

灰褐色土は近世の遺物を包含するが、近代以降の大規模な削平により、ほとんど残存していなかった。茶褐色砂質土は中世の遺物包含層で、その上面で、近世の土取穴を検出した。黄褐色粗砂および黄灰色粘土は、無遺物層であるため、堆積時期の特定は困難であるが、上下の堆積層の時期から弥生以降古代までと判断できる。黄灰色粘土は、Y=2000より東でのみ確認された。

黒色土は、東へゆくに従って粘性が強くなる。少量ながら、縄文晩期の土器が出土した。調査区西半では、この黒色土上面で弥生時代の自然流路SR2~6を検出した。いずれも北から南へ流れた白川系流路である。黄灰色シルトは、調査区一帯に堆積しており、中世・近世の土取りの対象となった土層である。井戸側面の観察により、1.6m前後の厚みを持ち、その下層には赤褐色砂礫が堆積していることを確認している。調査区西辺では、この黄灰色シルトを切り込んで形成された自然流路SR7を検出した。淡褐色砂質土は、このSR7の肩部から黄灰色シルトを覆って堆積しており、SR7の溢流堆積物と理解できる。SR7および淡褐色砂質土からは、縄文後期の遺物が出土した。

一方、西調査区の基本的な堆積は、上から順に表土、灰褐色土、茶褐色砂質土、赤褐色砂礫であった。東調査区で認められた黄褐色粗砂以下黄灰色シルトまでの堆積土は存在せず、赤褐色砂礫が茶褐色砂質土の下に堆積していた。

(2) 遺 構 (図版21~22, 図44~47)

旧病棟基礎などによって遺跡は大きく破壊されていたが、流路・溝・井戸・土取穴など、土地利用の変遷にともなって異なる性格の遺構を検出した。

先史時代の遺構 縄文・弥生時代の遺構は自然流路のみで、人為的に形成されたもの

京都大学病院構内A G 20・A F 20区の発掘調査

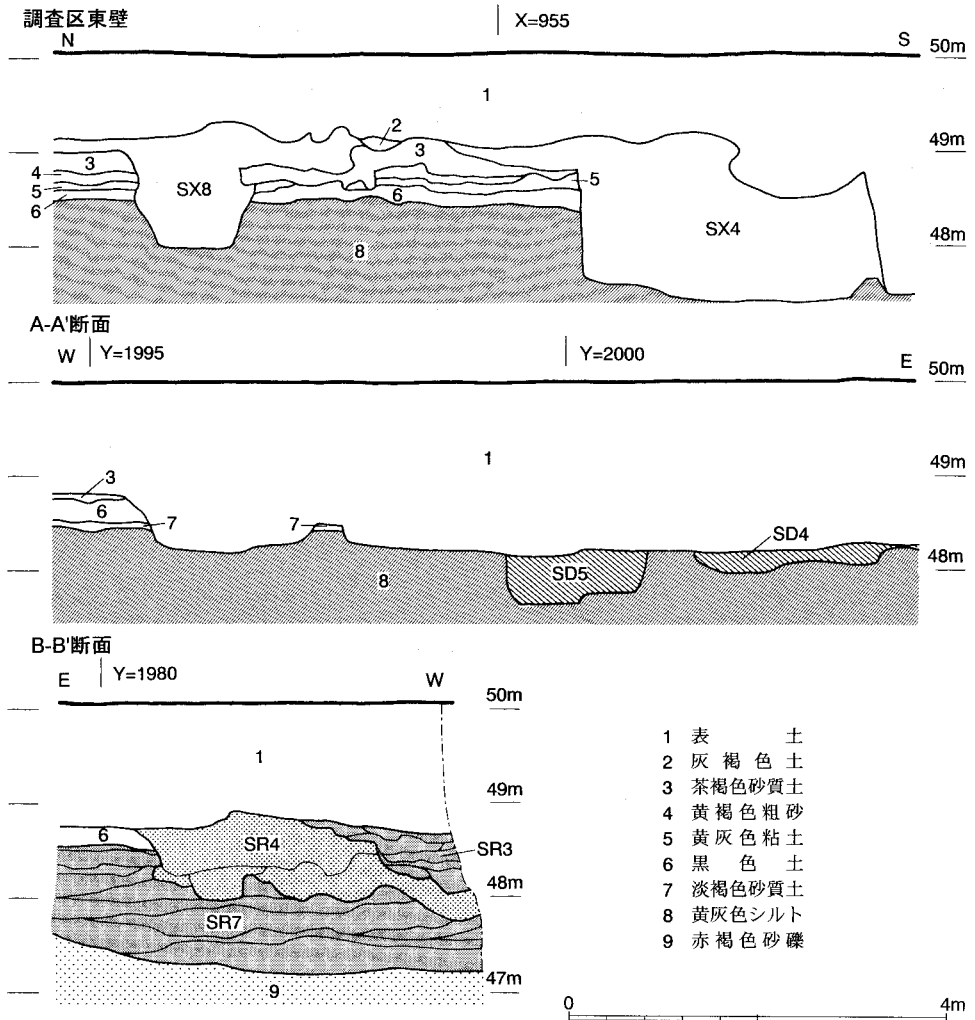


図43 東調査区の層位 縮尺1/80

はない。縄文時代の流路SR7は調査区西辺でみつき、流路の東端は検出できたが、西端は調査区外である。縄文後期の遺物を多く含み、またこの溢流である淡褐色砂質土からは保存状態のよい縄文土器が出土していることから、141地点でも想定されたように、縄文人の活動が調査区一帯にまで及んでいたことを物語る〔千葉91〕。

弥生時代の流路のうち、SR3とSR4は調査区西端で検出された。SR4はSR3に西端を切られており、いずれも一部を検出したにとどまった。SR4は埋土に前期の土器、SR3は中期の土器を含んでおり、それぞれその時期に埋積が進んだものと判断しうる。

A G 20区の遺構と遺物

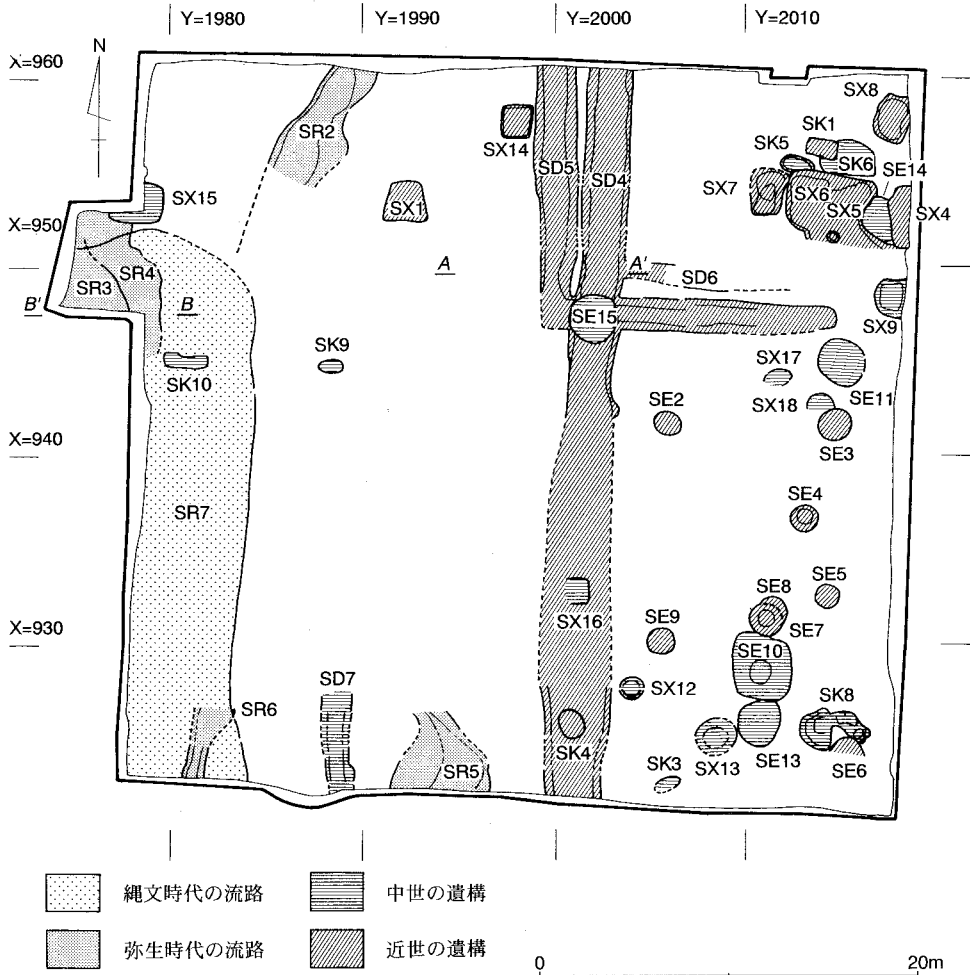


図44 東調査区検出の遺構 縮尺1/400

SR 2は調査区西辺の北端，SR 5とSR 6は南端で検出した流路で，弥生後期～終末の土器を含んでいることから，一連のものである可能性が高い。これらの流路から出土した弥生土器はほとんど摩滅していないことから，医学部・病院構内に想定されている弥生遺跡から流れ込んだものと理解できる〔伊藤95〕。

中世の遺構 中世の遺構は，12世紀後葉～13世紀前葉を中心とする中世前半と，14世紀後半～15世紀の中世後半の2時期に大別できる。

中世前半の遺構には，井戸・溝・土坑などがある。SE 10・13・14，SX 9・15・16～18がこの時期の井戸である。SE 10・13は石組の井戸側をもち，SE 10は石組の下に，さ

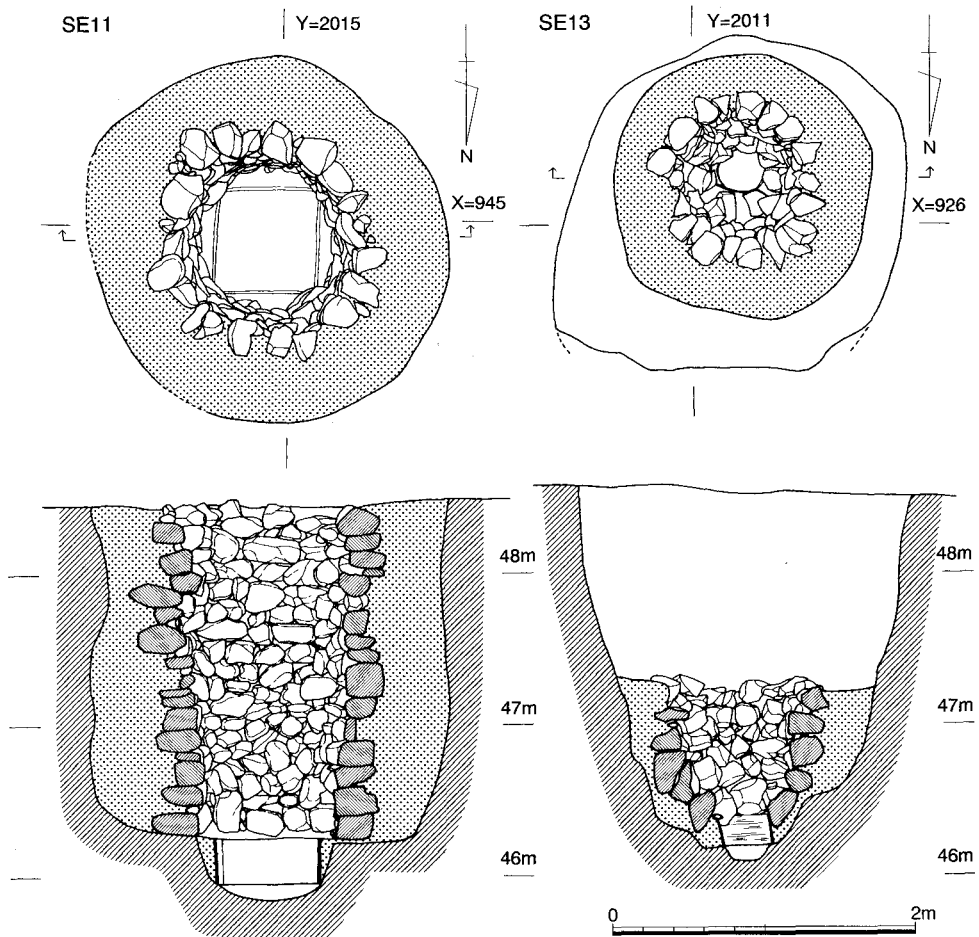


図45 井戸SE11・SE13 縮尺1/50

らに横板で木枠を構成している。ともに水溜に曲物を設置していた。SE14は、上部を近世の土取穴で大きく破壊されていた井戸で、横板による長方形木枠と水溜の曲物が残存していた。SX9・15は方形の掘形をもつ。木枠・石組などの痕跡がまったくみられなかったため、発掘当初、土取穴の可能性も考えたが、平面、断面の形態と砂礫層まで掘り込んでいることから、素掘ないしは木枠を用いた井戸と判断する。SX16～18は近代以降に大半を破壊されており、下底面がかろうじて残存していた。砂礫層まで掘り込んでいるため、井戸の可能性が高い。これらの井戸底の標高は、45.7～46.4mである。

調査区南西部で検出した溝SD7は断面逆台形で、幅1.5m深さ60cm前後をはかる。この時期の遺構は調査区東半に多く、SD7が土地利用の区画をなしていた可能性がある。

AG20区の遺構と遺物

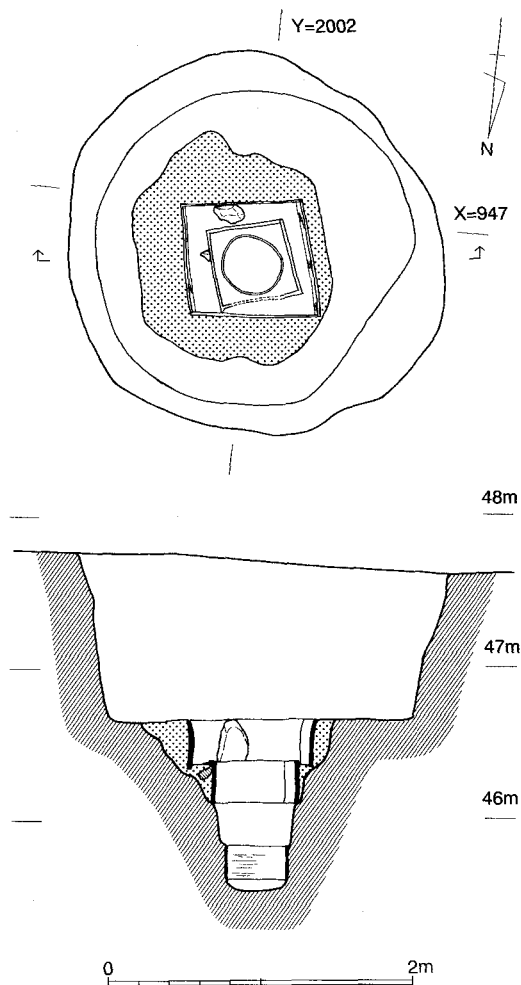


図46 井戸SE15 縮尺1/50

出土遺物が少ないため、時期の特定は困難であるが、13世紀代には埋積している。

中世前半の土坑はS X12とS K 9で、S X12は平面円形を呈し、直径1.2m深さ20cmをはかる。小児頭大の礫が中央に集められていた。S K 9は長さ1.3m幅75cm深さ40cmをはかる隅丸長方形の土坑。

中世後半の遺構には、井戸・土坑などがある。中世前半同様、遺構は東半に多い。

SE11・15がこの時期の井戸。SE11は石組の井戸側をもち、水溜に方形木枠を設置する。井戸底の標高、45.8m。SE15は井戸側上半の構造は不明で、下半は方形木枠2段で構成される。木枠の残りは非常に悪かったが、木製の釘を用いて固定しているのが観察さ

れた。水溜には曲物を設置する。井戸底の標高、45.5m。

中世後半の土坑には、S K 3・5・6・8・10、S X 13がある。S K 3・10は、多量の土師器・瓦器類が出土した土器溜。S K 10は後世に上部を削平されており、下部のみ検出した。S K 5は長さ1.8m幅90cm深さ20cmをはかる隅丸長方形の土坑で、埋土から完形の土師器皿が出土した。墓ないしは祭祀に関わる遺構であろう。S K 6・S X 13は集石をとまう土坑。S K 6は長さ3m幅1.8m深さ30cm、S X 13は直径2.1m深さ30cmをはかり、拳大から人頭大の礫が集中していた。

近世の遺構 井戸・溝・土取穴などがある。S E 2～9がこの時期の井戸であり、溝S D 4より東側でかつ南半に集中する。井戸側は石組で構築しているものが多く、さらに石組の下にS E 2・6は桶、S E 7は横板木枠を設置している。S E 3は最下部に丸太を井桁に組んだ後、石を組み上げており、裏込めには拳大を中心とした礫を充填している。S E 5は井戸瓦を用いて井戸側を構築しており、その下部に桶を設置している。S E 9は井戸側上半の構造は不明で、下半は桶を上下2段に組んだ痕跡のみが確認できた。S E 7に切られるS E 8の井戸側は不明。S E 7～9の水溜には、曲物が設置してあった。これらの井戸の底の標高は、45.4～46.0mのあいだに分布する。

近世に属する溝は、S D 4～6である。S D 4は調査区ほぼ中央を南北にはしる溝で北端、南端ともに調査区外へと続く。断面逆台形で、幅2.4m前後、深さは30～60cmをはかる。S D 5はS D 4の西側を平行して南北にはしり、X=948付近で東に直角に折れ曲がり、Y=2015付近で立ち上がる。断面逆台形で、幅1.8～2.2m、深さ60cm前後をはかる。S D 6は、X=950付近でS D 4の東側肩から東へ伸びる。後世の削平・攪乱により、形状・規模は明確ではないが、Y=2017付近で立ち上がるようである。これらの溝の下底部には、粘質土が堆積しており、滞水する状況があったことを示している。出土遺物からみてS D 5の埋没が遅れるようであるが、明瞭な切り合い関係は観察されなかった。これらの溝は、17世紀から18世紀にかけて埋積が進んでいったと理解する。

土取穴は調査区北東で集中して発見され（S X 4～8）、西辺にもみられた（S X 1）。いずれも平面が不定形で黄灰色シルトを掘りきったところで掘削を止めている。

S K 1は長さ1.6m幅90cm深さ30cmをはかる長方形の土坑で、拳大から人頭大の礫で充填されていた。土師器の小片が少量出土したのみで時期の特定は困難であるが、S K 6を切って構築されていることから、近世に下る遺構と判断した。S K 4は直径1.5m前後の不整円形の土坑で、幕末の蓮月焼を含む陶磁器が出土した。

A G 20区の遺構と遺物

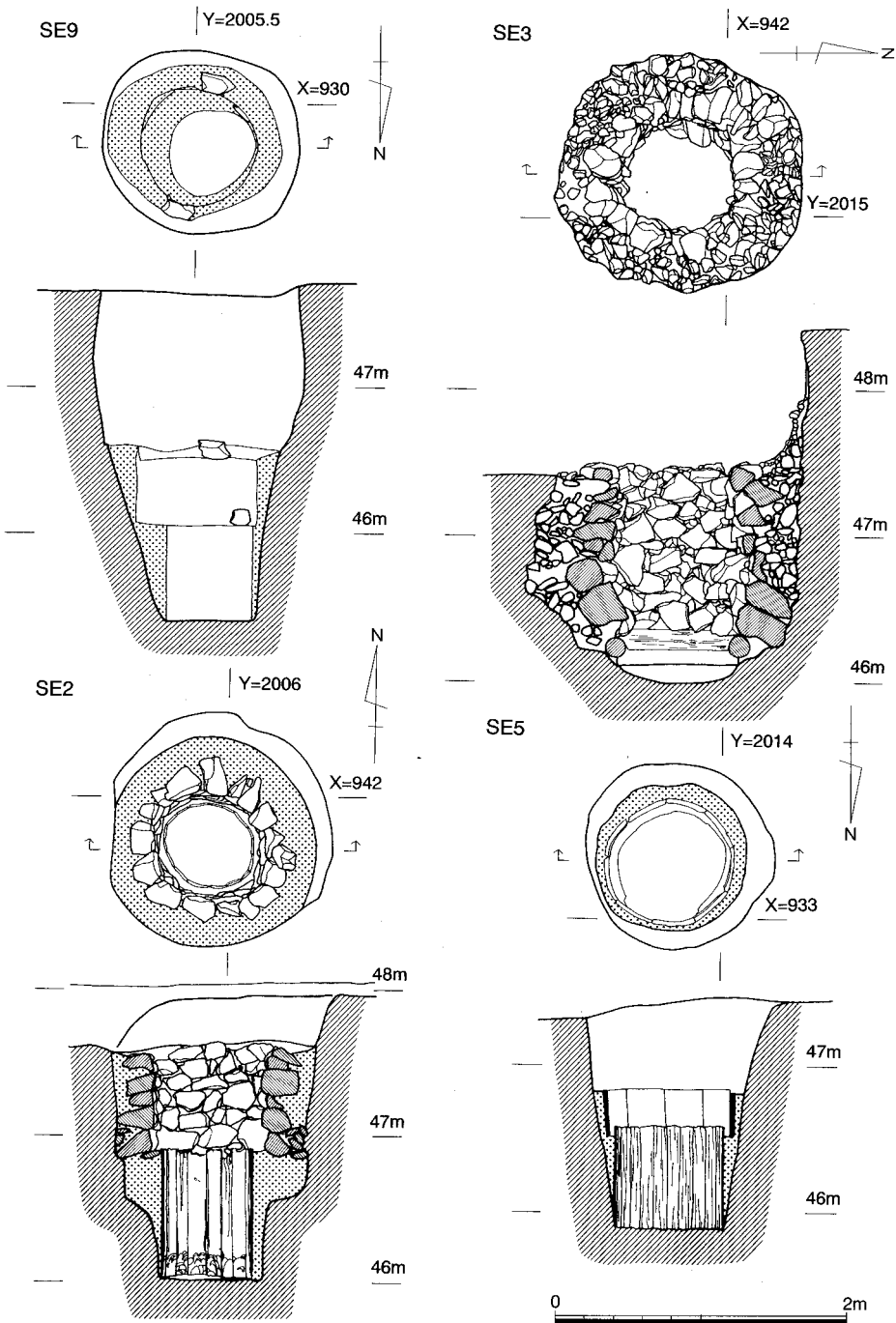


図47 井戸SE9・SE3・SE2・SE5 縮尺1/50

(3) 出土遺物 (図版24～34, 図48～66, 表6)

縄文時代の遺物 II 1～II 8は、淡褐色砂質土出土の縄文土器。II 1・II 5は有文深鉢。II 1は口頸部が外反し、口縁端部を短く内側へ折り曲げる。口縁端部直下に刻目隆帯を横走させ、8字状浮文を貼り付ける。口頸部には沈線で三角文と逆三角文を描き、2段左撚縄文を充填する。内外面とも磨いて仕上げる。口径25cm, 器高16.2cm。II 5は縁帯文土器の口縁部で、く字形に屈曲する。沈線で長方形区画文を描いた後、2段左撚縄文を施文する。II 2・II 6は縄文地深鉢。II 2は前面が肥厚する口縁部と胴部に2段左撚縄文を施文する。II 6は肥厚する口縁内面に2段左撚縄文を施し、外面は二枚貝条痕で仕上げる。II 3は深鉢の胴部で、櫛状施文具による条線文を斜格子に施す。II 4はボウル形の有文浅鉢。文様意匠は上下2段で構成される。上段は三角文と逆三角文からなり、逆三角文の底辺中央にJ字文がとりつくともみられる。下段は長方形文とJ字渦巻文が描かれる。2段左撚縄文を充填し、内外面とも磨いて仕上げる。口径30.4cm, 器高12.7cm。II 7は無文深鉢の口縁部。口縁外側端部が丸く肥厚する。II 8は底部資料。底部直上で垂直気味に立ち上がった後、外傾する。

II 9～II 39はSR7出土の縄文土器。II 9～II 13は有文深鉢の口縁部。II 9は口縁端部を内外に肥厚させ、上面に沈線を1条巡らせる。II 10・II 11は前面がわずかに肥厚し、弧線文・同心円文を施す。II 12は口縁内面直下に刺突をともなう横走沈線をめぐらし、口縁

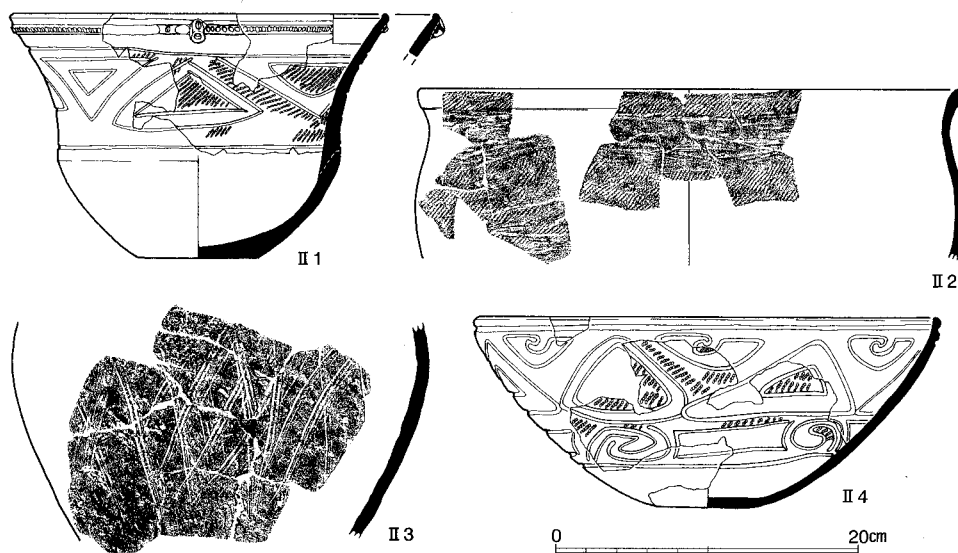


図48 淡褐色砂質土出土土器 (II 1～II 4 縄文後期) 縮尺1/5

A G 20区の遺構と遺物

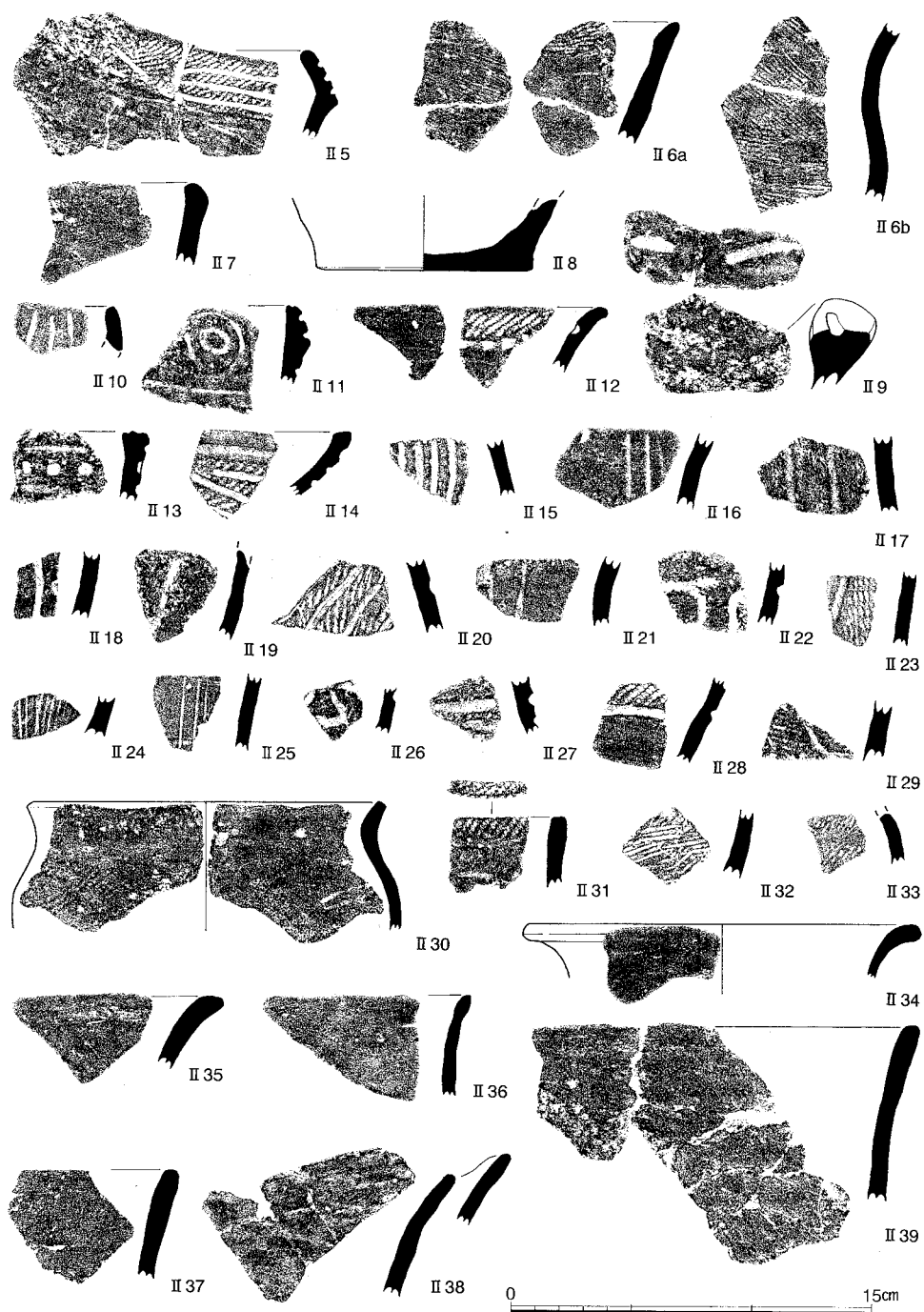


図49 淡褐色砂質土出土土器 (II 5 ~ II 8 縄文後期), SR 7 出土土器 (II 9 ~ II 39 縄文後期)
縮尺1/3

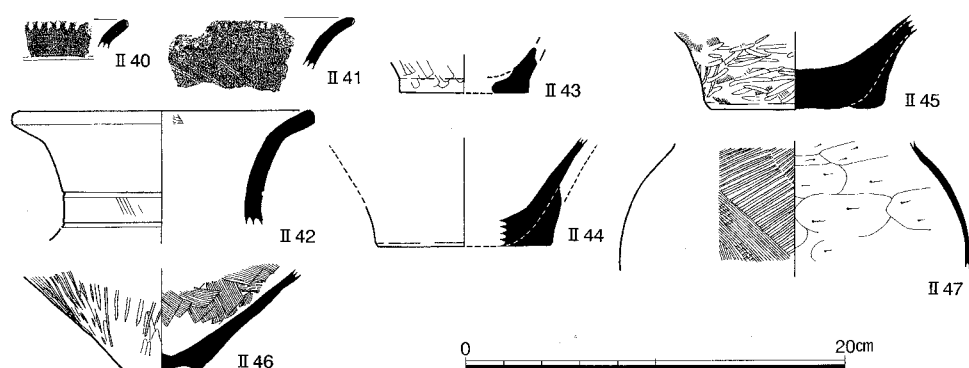


図50 S R 4 出土土器 (II 40～II 45弥生前期), S R 5 出土土器 (II 46弥生後期・II 47庄内式)

端部との間に2段左撚縄文を充填する。II 13は口縁部前面に沈線を2条横走させ、その間に円形刺突列を配する。II 14はボウル形の有文浅鉢。三角文を基調とする文様意匠に2段左撚縄文を充填している。II 15～II 29は有文深鉢の胴部資料。多条沈線文あるいは条線文を用いた縦位の文様が多いが、帯縄文による横位の文様も認められる。縄文を用いている資料はII 20・II 23・II 28・II 29で、原体はいずれも2段左撚である。II 30～II 34は縄文地の深鉢ないしは鉢。II 30は口径14.4cmをはかる鉢で、胴部に2段左撚縄文を施文する。II 31は口縁外面に加えて口縁上面にも2段左撚縄文を施す。II 32・II 33は胴部資料で、縄文原体は、II 32が1段左撚、II 33が2段左撚である。II 35～II 39は無文深鉢の口縁部。

淡褐色砂質土およびS R 7から出土した縄文土器はいずれも縄文後期前葉に属し、II 9が縁帯文成立期であるほかは北白川上層式2期に比定できるものが主体を占める。

弥生時代の遺物 II 40～II 45はS R 4出土の弥生土器。II 40・II 41は甕。口縁部が外反し、口縁端部に刻みを施す。II 40は頸部に巡らした篋描沈線文の一部が残存する。II 42は壺。口縁部が外反し、頸部に2条以上の篋描沈線文を施す。外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目で整形した後、磨いて仕上げる。II 43～II 45は底部資料。これらは、弥生前期新段階を中心とするものであろう。

II 46・II 47はS R 5出土土器。II 46は甕の底部。外面は叩きを施すが、胴部下端までは及ばない。内面は刷毛目調整で仕上げる。輪台技法で成形されており、底部外面が凹む。II 47は外面叩き成形の後、一部に刷毛目、内面は削りで仕上げている。器厚が3mmと薄い。暗褐色で角閃石を多量に含み、生駒西麓産の胎土の特徴を示す、庄内式の甕である。これらは弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてのものである。

中世の遺物 II 48～II 96はS E 14出土遺物。II 48～II 73は土師器皿。II 48～II 59は皿

A I, II 60～II 73は皿A II。II 48は2段撫で面取り手法C₃類, II 49・II 50・II 60～II 63は1段撫で素縁手法D₃類, II 51・II 52・II 64～II 68は1段撫で面取り手法D₄類, II 53～II 58・II 69～II 73は1段撫で面取り手法D₅類, II 59は1段撫で面取り手法D₆類である。II 65は口縁端部に煤が厚く付着し, 灯明皿として使用されている。皿A Iは口径14～15cm, 皿A IIは口径9cmにピークがあり, 口縁形態は, 皿A IではD₅類が多く, D₄類, D₃類が続く, 皿A IIではD₃類が過半数を占め, D₄類, D₅類が一定量を占める(表6 p.102)。II 74・II 75は土師器受皿。口径は7.6cmをはかる。

II 76～II 79は楠葉型瓦器碗。II 76・II 77は口縁内面に浅い沈線を1条めぐらす。口縁部の残存するII 76～II 78は, いずれも内面にのみ篋磨きを施している。II 79は見込みにジグザグになると思われる暗文を施す。II 80は口径8.0cmをはかる瓦器の小型皿。内面にのみ粗い篋磨きを施す。これらは, 橋本久和の編年によるⅢ-1期にあたるものであろう〔橋本80〕。II 81～II 84は白磁碗。II 81～II 83は口縁部が玉縁状を呈し, II 84は口縁部が端反りになる。II 85は白磁皿。底部外面を露胎とし, 見込みに文様を描く。II 86は白磁の合子蓋。II 87は砥石。最大幅3.0cm, 現存最大長6.4cmをはかる。使用面は1面のみである。

II 88は土師器土釜。菅原正明の分類による摂津C 2型であり〔菅原83〕, 10世紀ごろの古い資料の混入である。II 89は一般に「塩壺」と呼ばれている土師器鉢。口径19.2cm, 高さ16.2cmをはかり, 内面と口縁部外面は撫でて仕上げ, 外面は粘土紐の巻き上げ痕をそのまま残す。口縁部内面にのみ3.5cm前後の幅で炭化物の付着が観察される。中世の木製置き炉には金属製や土製の火容が仕掛けられており〔梅川94〕, 置き炉の火容として利用されたことを示す痕跡の可能性はある。京都大学構内では, 110・143・241地点の調査で類例が報告されている〔五十川83, 五十川・宮本88, 古賀99〕。

II 90～II 93は東播系須恵器。II 90は甕, II 91～II 93はすり鉢。II 94・II 95は瓦器羽釜。口径は, II 94が16.0cm, II 95が20.2cmで, いずれも体部は丸みを帯びる。II 96は瓦器盤。体部は丸みを帯び, 三脚がつく。内外面とも剥落が著しい。

以上のS E 14から出土した遺物は, 12世紀末13世紀初頭ごろのものであろう。

II 97～II 105はS X 17出土遺物。II 97～II 104は土師器皿。II 97～II 99は2段撫で手法で, それぞれC₃類, C₄類, C₅類に比定でき, 口径15cm前後である。II 100～II 104は1段撫で面取り手法D₄類で, II 100・II 101は口径15cm前後のA I, II 102～II 104は口径9cm前後のA IIである。II 105は灰釉陶器皿。見込みに圈線を1条めぐらす。口縁部を輪花に作る。これらは12世紀後葉ごろの資料である。

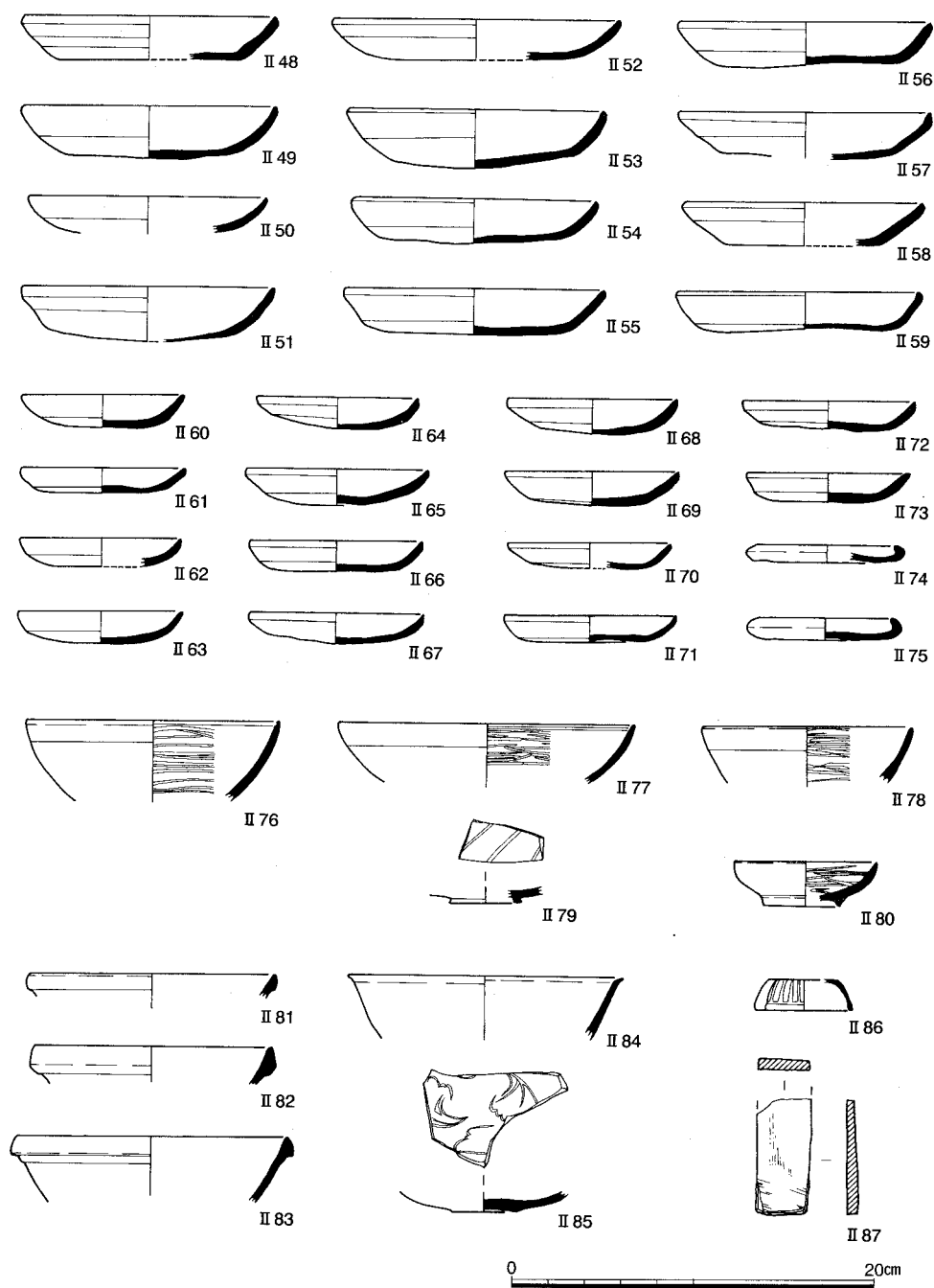


図51 S E 14出土遺物(1) (II 48～II 75土師器, II 76～II 80瓦器, II 81～II 85白磁, II 87石製品)

A G 20区の遺構と遺物

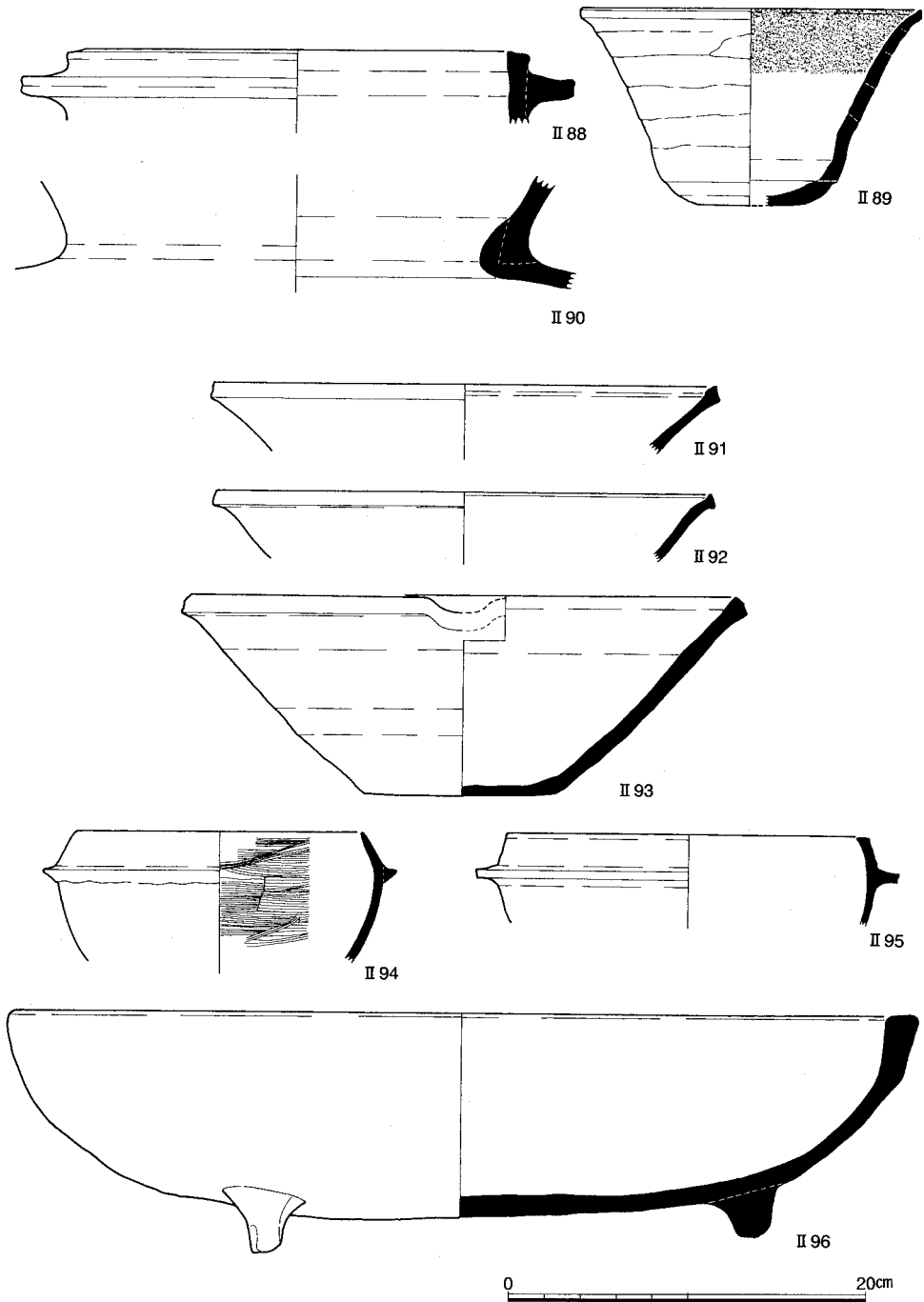


図52 S E 14出土遺物(2) (II 88・II 89土師器, II 90～II 93須恵器, II 94～II 96瓦器)

Ⅱ106～Ⅱ113はS X 9出土遺物。Ⅱ106・Ⅱ107は口径16cm前後の皿A Iで、C₃類およびD₂類。Ⅱ108～Ⅱ112は口径9～10cmの皿A IIで、Ⅱ108・Ⅱ109はC₃類、Ⅱ110・Ⅱ111はD₃類、Ⅱ112はD₄類である。Ⅱ113は白磁で、口縁が玉縁状に肥厚する椀である。これらは12世紀後葉ごろの資料である。

Ⅱ114～Ⅱ120はS E 10裏込め出土遺物。Ⅱ114～Ⅱ116は口径13～17cmの土師器皿A I。いずれも1段撫で手法で、Ⅱ114はD₃類、Ⅱ115はD₅類、Ⅱ116はD₂類である。Ⅱ117・Ⅱ118は口径7～8cmの土師器皿A IIで、ともに1段撫で素縁手法D₃類。Ⅱ119は、底部外面に回転による糸切り痕を残す皿。内外面すべて回転撫でによって仕上げる。Ⅱ120は瓦器羽釜。鍔は上方へ傾き、体部は直線的である。

Ⅱ121～Ⅱ124はS X 12出土の土師器皿で、1段撫で素縁手法D₂類。口径は、Ⅱ121～Ⅱ123が11cm前後、Ⅱ124が7.7cmである。

Ⅱ125・Ⅱ126はS K 9出土の土師器皿。ともに口径10cm前後で、1段撫で面取り手法D₄類である。

Ⅱ127～Ⅱ138はS X 16出土土師器。Ⅱ127～Ⅱ137は皿で、口径はⅡ127が13cm、Ⅱ128～Ⅱ130が10～11cm、Ⅱ131～Ⅱ137が8cm前後である。口縁部形態は、D₃類が多く（Ⅱ127・Ⅱ128・Ⅱ132～Ⅱ135）、C₄類（Ⅱ130）、D₄類（Ⅱ136・Ⅱ137）、D₅類（Ⅱ129）も認められる。Ⅱ138は受皿。

S K 9・S E 10裏込め・S X 12・S X 16出土遺物は13世紀前葉ごろの資料であろう。

Ⅱ139～Ⅱ176はS K 3出土遺物。Ⅱ139～Ⅱ150は赤褐色を呈する土師器皿、Ⅱ151～Ⅱ174は灰白色を呈する土師器椀。土師器の皿と椀での、こうした明瞭な色調の違いは、後述するS K 5・S K 10・S E 15でも同様である。Ⅱ139～Ⅱ144は皿A I、Ⅱ145～Ⅱ150は皿A IIで、A Iは11cm、A IIは8cmに口径のピークがある（表6）。口縁形態は、皿A Iでは1段撫で素縁手法E₁類が多く、E₃類、E₄類がこれに続き、皿A IIではE₁類が過半数を占め、E₃類がそれに次ぐ。Ⅱ151～Ⅱ162は椀A I、Ⅱ163～Ⅱ174は椀A IIで、A Iは12cm、A IIは7cmに口径のピークがある。椀A IIの底部は、凹み底となる。口縁形態は、椀A IではE₁類が6割以上を占め、E₂類がそれに次ぎ、A IIではE₁類が多く、E₂類、E₃類がそれに続く。Ⅱ175は土師器の羽釜。断面三角形の鍔がつく。口径14cm。Ⅱ176は瓦器鍋。口縁部は屈曲があまく外方へ立ち上がる。

Ⅱ177～Ⅱ189はS K 5出土の土師器皿および椀。Ⅱ177～Ⅱ182は赤褐色を呈する皿で、口径10～12cm。Ⅱ177・Ⅱ178はE₃類、Ⅱ179～Ⅱ181はE₄類、Ⅱ182はE₁類。Ⅱ183～Ⅱ

A G 20区の遺構と遺物

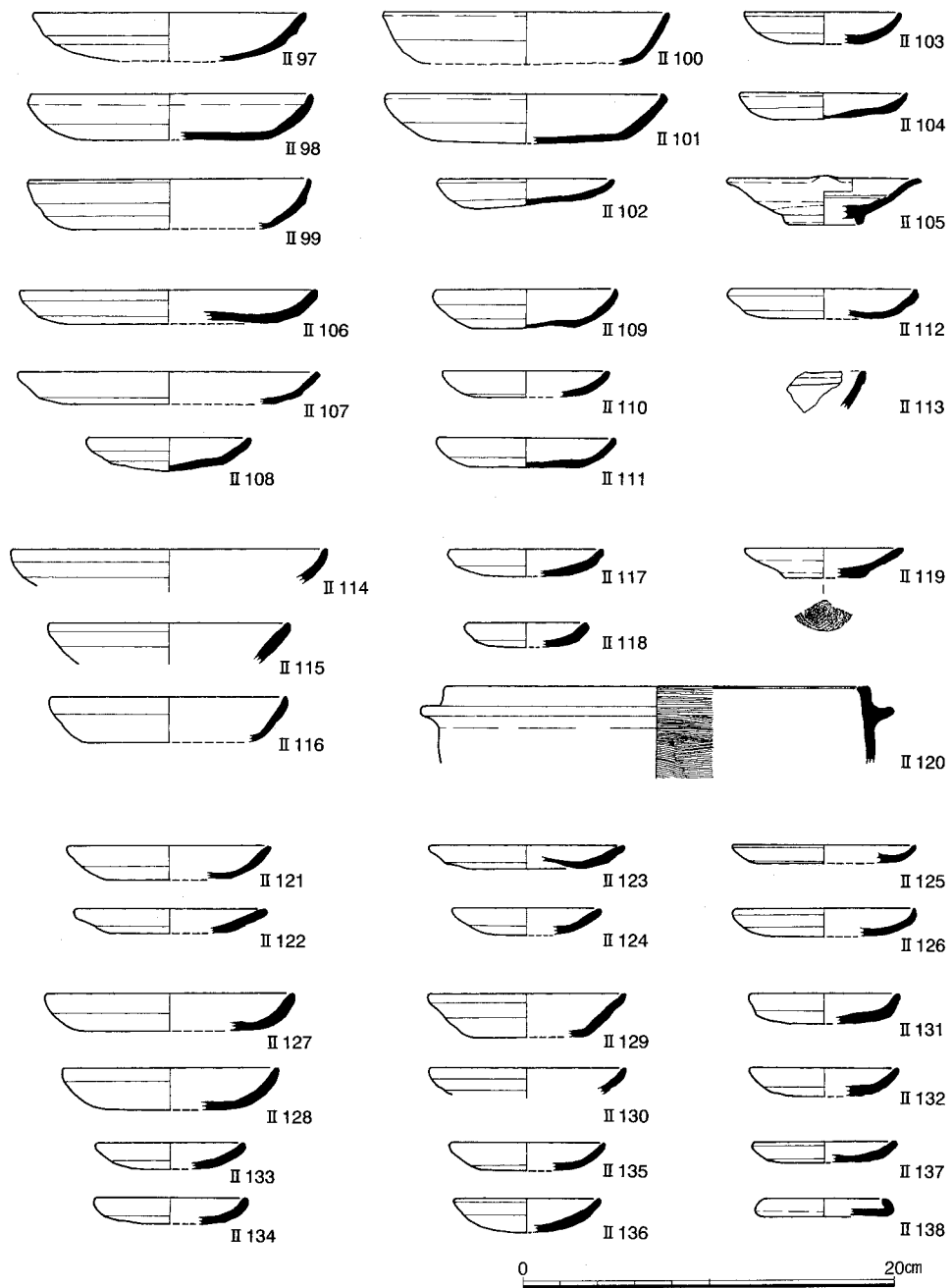


図53 S X 17出土遺物 (II 97～II 104土師器, II 105灰釉陶器), S X 9 出土遺物 (II 106～II 112土師器, II 113白磁), S E 10出土遺物 (II 114～II 119土師器, II 120瓦器), S X 12出土遺物 (II 121～II 124土師器), S K 9 出土遺物 (II 125・II 126土師器), S X 16出土遺物 (II 127～II 138土師器)

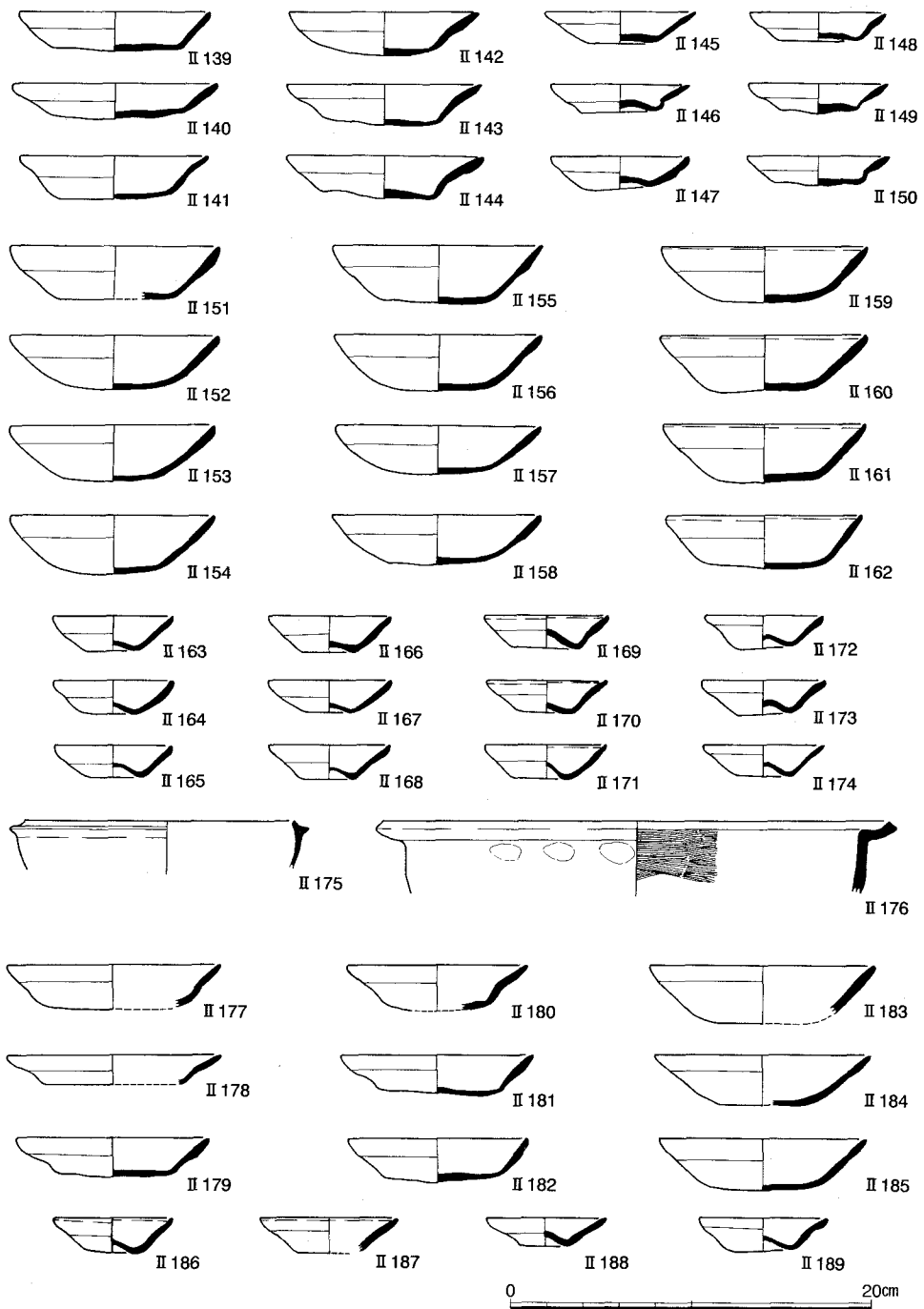


図54 S K 3 出土遺物 (II 139～II 175土師器, II 176瓦器), S K 5 出土遺物 (II 177～II 189土師器)

A G 20区の遺構と遺物

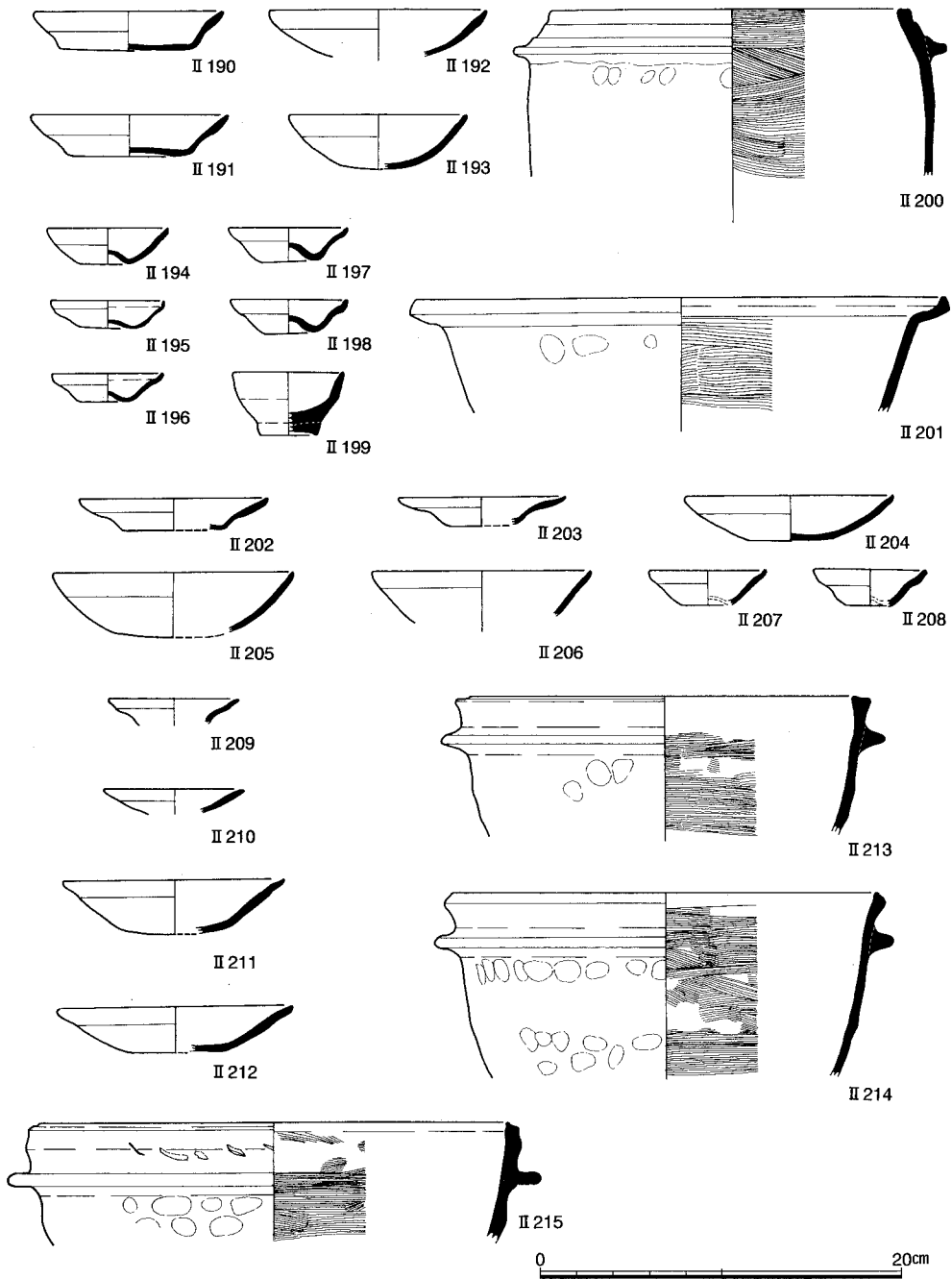


図55 S K10出土遺物 (II 190～II 198土師器, II 199灰釉系陶器, II 200・II 201瓦器), S E15出土遺物 (II 202～II 208土師器), S X13出土遺物 (II 209～212土師器, II 213～II 215瓦器)

189は灰白色を呈する椀で、Ⅱ183～Ⅱ185は口径12cm前後の椀AⅠ、Ⅱ186～Ⅱ189は口径7cm前後の椀AⅡで凹み底となる。口縁形態は、AⅠではE₁類が多く、AⅡではE₂・E₃・E₄類が認められる。

Ⅱ190～Ⅱ201はS K 10出土遺物。Ⅱ190・Ⅱ191は赤褐色の土師器皿、Ⅱ192～Ⅱ198は灰白色の土師器椀。皿は口径11cmにピークがくるAⅠと7cmにピークがあるAⅡがあり、口縁形態はAⅠではE₃類が主体を占め、AⅡではE₁・E₂・E₃類が認められる(表6)。椀は口径10～11cmにピークがあるAⅠと7cmにピークがあり凹み底となるAⅡがある。口縁形態はAⅠではE₁類が圧倒的に多く、AⅡではE₂類、E₃類、E₁類の順に一定量を占める。Ⅱ199は灰釉系陶器の小杯。断面三角形の低い高台がつく。Ⅱ200は瓦器羽釜。口縁部と鐙の間を断面「レ」状の段が2条めぐる。Ⅱ201は瓦器鍋。口縁部の屈曲は立ち上がりがあまく、体部は直線的である。

Ⅱ202～Ⅱ208はS E 15出土土師器。Ⅱ202・Ⅱ203は赤褐色の土師器皿で、E₄類とE₃類。Ⅱ204～Ⅱ208は灰白色の土師器椀。

S K 3・S K 5・S K 10・S E 10から出土した遺物は、14世紀後半のものであろう。

Ⅱ209～Ⅱ215はS X 13出土遺物。Ⅱ209～Ⅱ212は土師器皿。14世紀の段階で認められた皿と椀の違いは、椀の器高の低下と褐色化にともない不明瞭になる。Ⅱ209はE₂類、Ⅱ210～Ⅱ212はF₂類。Ⅱ213～Ⅱ215は瓦器羽釜。外面は指押さえ、内面は刷毛目調整で仕上げる。

Ⅱ216～Ⅱ235はS K 6出土遺物。Ⅱ216～Ⅱ229は土師器皿。口径は15cm前後、10～12cm、6～8cmの3法量を認めることができる。口縁形態は、Ⅱ222・Ⅱ227がE₁類、Ⅱ223・Ⅱ224がE₂類、Ⅱ225・Ⅱ226がE₃類、Ⅱ228がE₄類、Ⅱ216・Ⅱ229がF₁類、Ⅱ217はF₂類、Ⅱ218～Ⅱ220がF₃類、Ⅱ221がF₄類である。

Ⅱ230は鉄釉陶器、Ⅱ231・Ⅱ232は灰釉系陶器である。Ⅱ231は卸皿で、口縁端部を内側に折り返している。Ⅱ233は青磁椀。高台および底部外面を露胎とする。外面は櫛歯文を垂下させ、内面は2条1単位の沈線で曲線文を描き、そのあいだを櫛歯による刺突で埋めている。13世紀の遺物の混入であろう。Ⅱ235は信楽すり鉢。口縁部に面取りを施し、外側端部がやや張り出す。外面は撫で仕上げ、内面は剥落が著しく、仕上げ方および、すり目の有無は不明である。黄白色を呈し、焼成は軟質である。山田猛の分類によるⅡb型式にあたる〔山田90〕。

Ⅱ236～Ⅱ238はS E 11裏込め、Ⅱ239～Ⅱ249はS E 11埋土出土遺物。Ⅱ236～Ⅱ244は土

AG20区の遺構と遺物

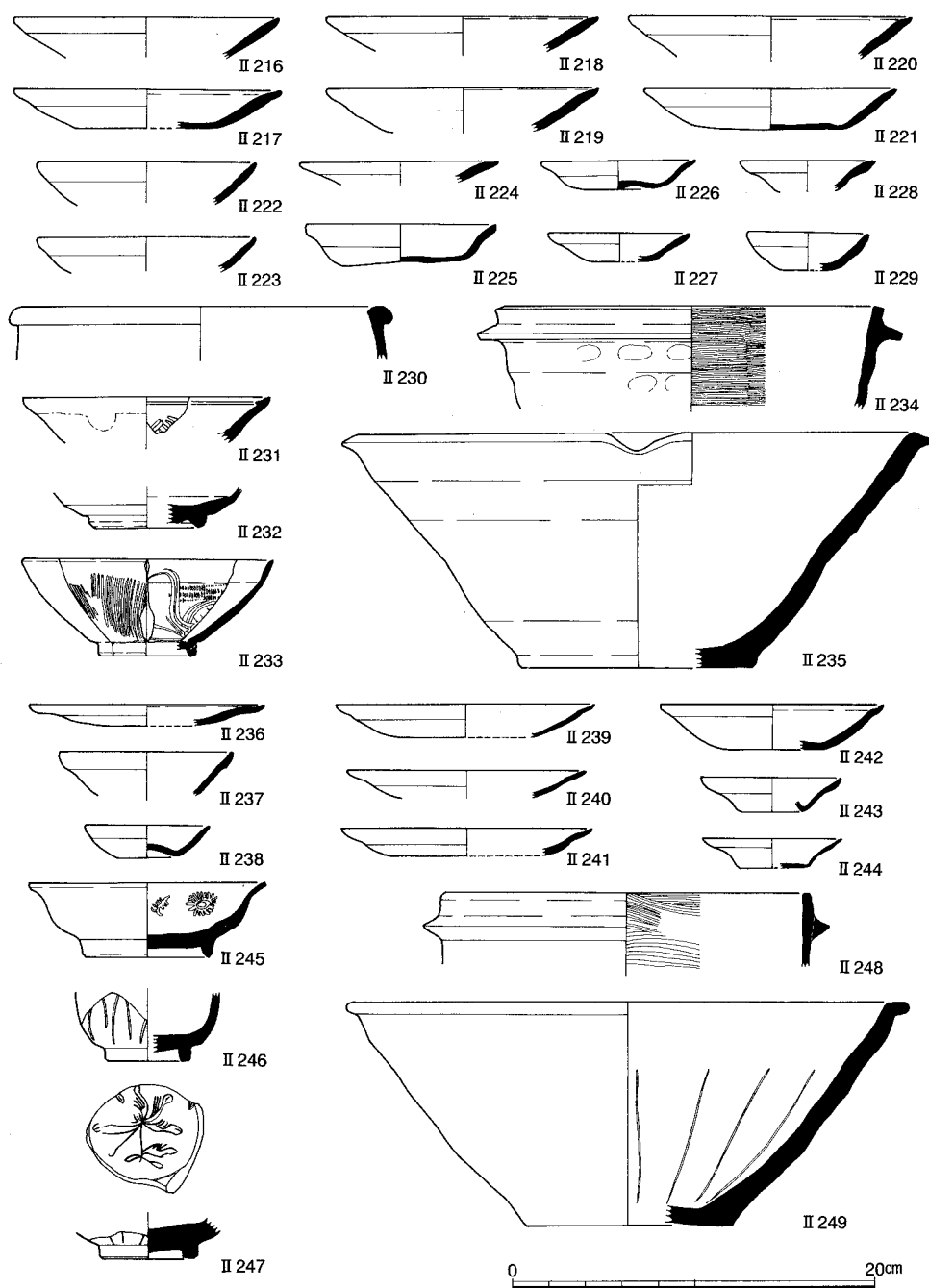
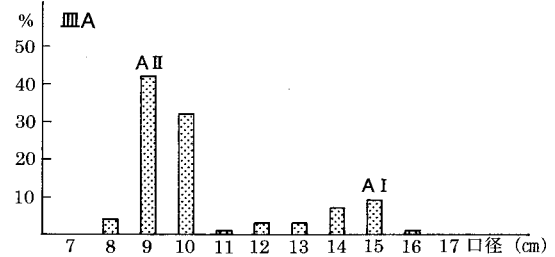


図56 SK 6 出土遺物 (II 216～II 229土師器, II 230鉄釉陶器, II 231・II 232灰釉系陶器, II 233青磁, II 234瓦器, II 235信楽), SE11出土遺物 (II 236～II 244土師器, II 245白磁, II 246・II 247青磁, II 248瓦器, II 249信楽)

表6 SE14・SK3・SK10出土土師器計測結果

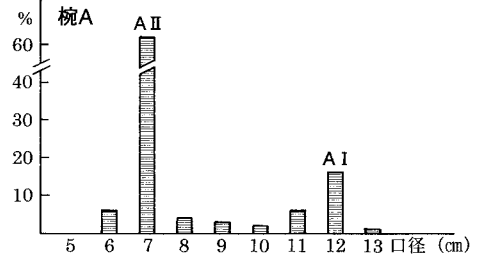
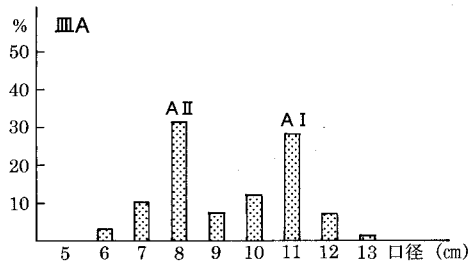
SE14

	皿AⅡ	皿AⅠ
口縁形態	80.6個体	23.4個体
C ₃ 類	1.6%	4.6%
D ₃ 類	53.8%	26.6%
D ₄ 類	22.7%	27.0%
D ₅ 類	21.9%	35.0%
D ₆ 類		6.8%
合計	100.0%	100.0%



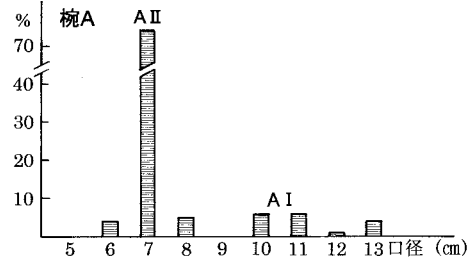
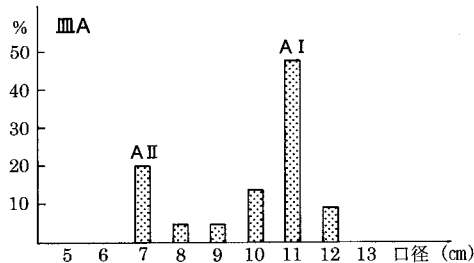
SK3

	皿AⅡ	皿AⅠ	碗AⅡ	碗AⅠ
口縁形態	26.9個体	24.6個体	7.6個体	23.0個体
E ₁ 類	52.0%	41.3%	40.8%	66.3%
E ₂ 類	3.1%	1.7%	33.7%	31.9%
E ₃ 類	26.3%	29.2%	23.0%	1.4%
E ₄ 類	18.6%	27.8%	2.5%	0.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



SK10

	皿AⅡ	皿AⅠ	碗AⅡ	碗AⅠ
口縁形態	1.1個体	2.6個体	14.7個体	3.0個体
E ₁ 類	30.9%	28.8%	18.1%	88.9%
E ₂ 類	30.9%	6.4%	35.7%	8.3%
E ₃ 類	38.2%	60.9%	32.9%	2.8%
E ₄ 類		3.9%	13.3%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%



師器皿。口縁形態はⅡ238がE₁類、Ⅱ243がE₂類、Ⅱ244がE₃類、Ⅱ236・Ⅱ242がF₃類、Ⅱ239～Ⅱ241がF₄類。

Ⅱ245は白磁皿。口縁部内面にスタンプによる花文をもつ。Ⅱ246・Ⅱ247は青磁椀。外面に蓮弁文を施し、Ⅱ247は見込みに花文を描いている。Ⅱ248は瓦器羽釜。直線的な体部に、断面三角の鍔がつく。Ⅱ249は信楽すり鉢。口縁端部がつよく外側に張り出す。内面には、篋による1条1単位のすり目をもつ。褐色を呈し、焼成は硬質である。山田分類のⅡb型式、木戸雅寿の分類のB1a類にあたる〔山田90、木戸95〕。

SX13、SK6、SE11出土遺物は、15世紀後半ごろのものであろう。

近世の遺物 Ⅱ250～Ⅱ302は、SD4出土遺物。これらの遺物は、X=955付近を中心にまとまって発見され、用をなさなくなった器物が一括廃棄されたものであろう。

Ⅱ250～Ⅱ271は土師器皿。見込みに圈線をもつⅡ250～Ⅱ264と圈線をもたないⅡ265～Ⅱ271に大別される。口径は、圈線をもつものは12～13cmにピークをもち、Ⅱ250のように口径17cm前後の大型品もみられる。圈線は断面形がU字状を呈し、外側端部は体部との境が不明瞭である。圈線をもつ皿は、口縁端部を中心に煤が付着するものが多い。圈線をもたない皿は、口径10cm前後と7cm前後にピークをもつ。

Ⅱ272は焼塩壺。筒形で口縁端部に蓋受けの段をもつ。体部は型作りで、底部は小粘土塊を充填して成形する。口径5.5cm、最大径7.1cm、器高7.4cm。渡辺誠の分類によるB類〔渡辺85〕で刻印をもつが、外面は剥落がひどく「泉」を除いて判読できない。

Ⅱ273～Ⅱ276は天目椀。Ⅱ277・Ⅱ278は志野焼の皿。底部外面に、Ⅱ277は1個以上、Ⅱ278は3個の目跡が残る。Ⅱ279は黒織部の椀。内面全体と外側面の一部を残して鉄釉を施す。鉄釉をかけない部分に鉄絵で二重四角文を描き、長石釉を掛けている。Ⅱ280～Ⅱ283は唐津焼の椀・皿。Ⅱ280・Ⅱ281は椀で、Ⅱ280は高台に5個の砂目が残る。Ⅱ282・Ⅱ283は皿で、Ⅱ282は見込みに3個の砂目残り、Ⅱ283は内面に鉄絵を描いている。Ⅱ284は、内外面とも灰緑色の釉のかかる京焼系の陶器椀。Ⅱ285は陶器皿。内面から口縁部外面にかけて白色釉の下地に淡緑色の釉が施される。Ⅱ286は陶器花生。内外面とも濃緑色の釉がかかり、内面には叩きの痕跡である青海波文がわずかに残る。高取焼あるいは上野焼とみられる。Ⅱ287は伊万里系の青磁椀。Ⅱ288～Ⅱ290は染付。Ⅱ288は天目形椀、Ⅱ289は筒形椀で、初期伊万里である。Ⅱ290は竹笹文を描く小杯。Ⅱ291・Ⅱ292は輸入磁器青花で、Ⅱ291は椀、Ⅱ292は皿である。Ⅱ291・Ⅱ292ともに畳付の釉は掻き取られているが、Ⅱ291は畳付周辺に砂が付着している。

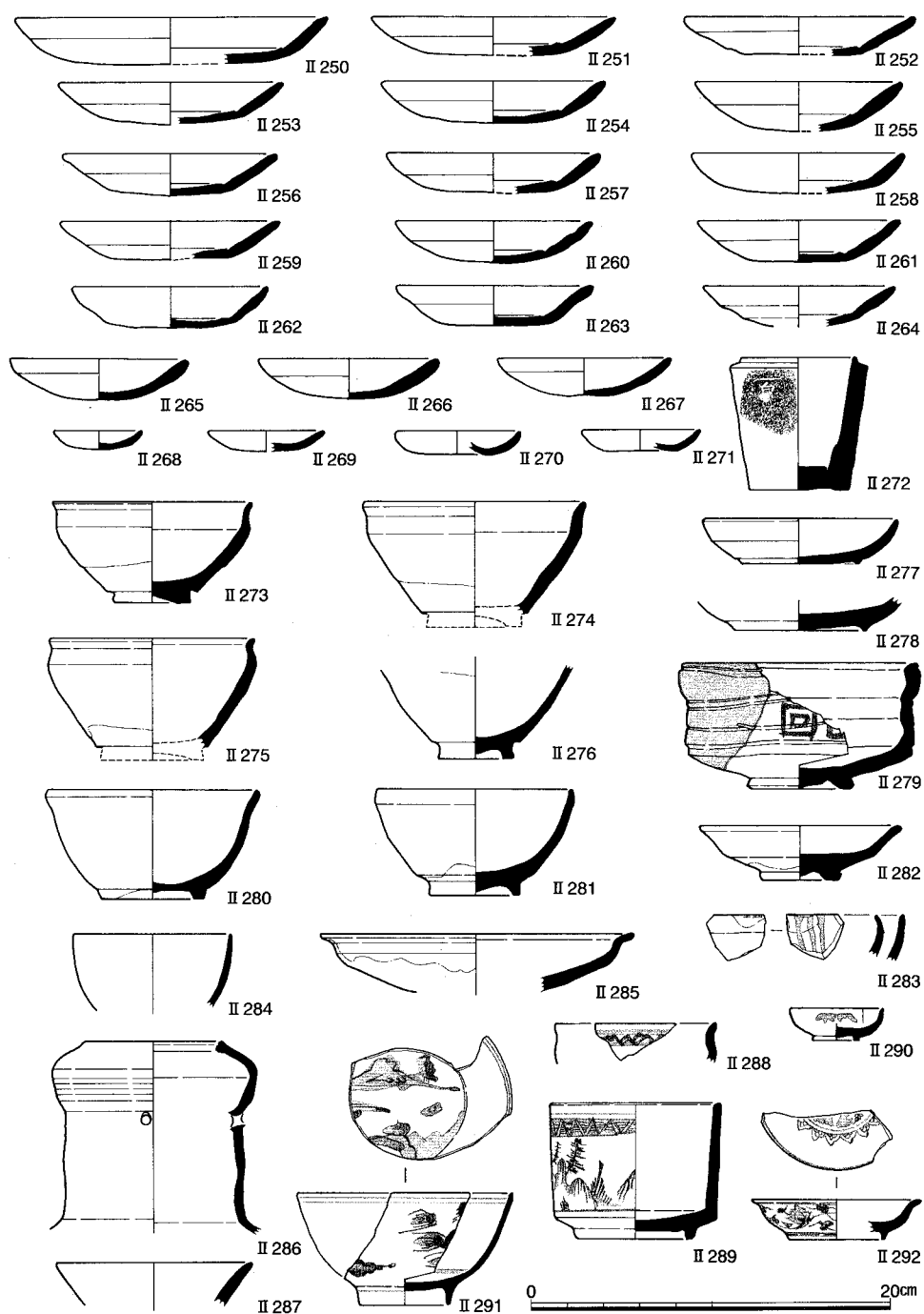


図57 S D 4 出土遺物(1) (II 250～II 272土師器, II 273～II 286陶器, II 287青磁, II 288～II 290染付, II 291・II 292青花)

A G 20区の遺構と遺物

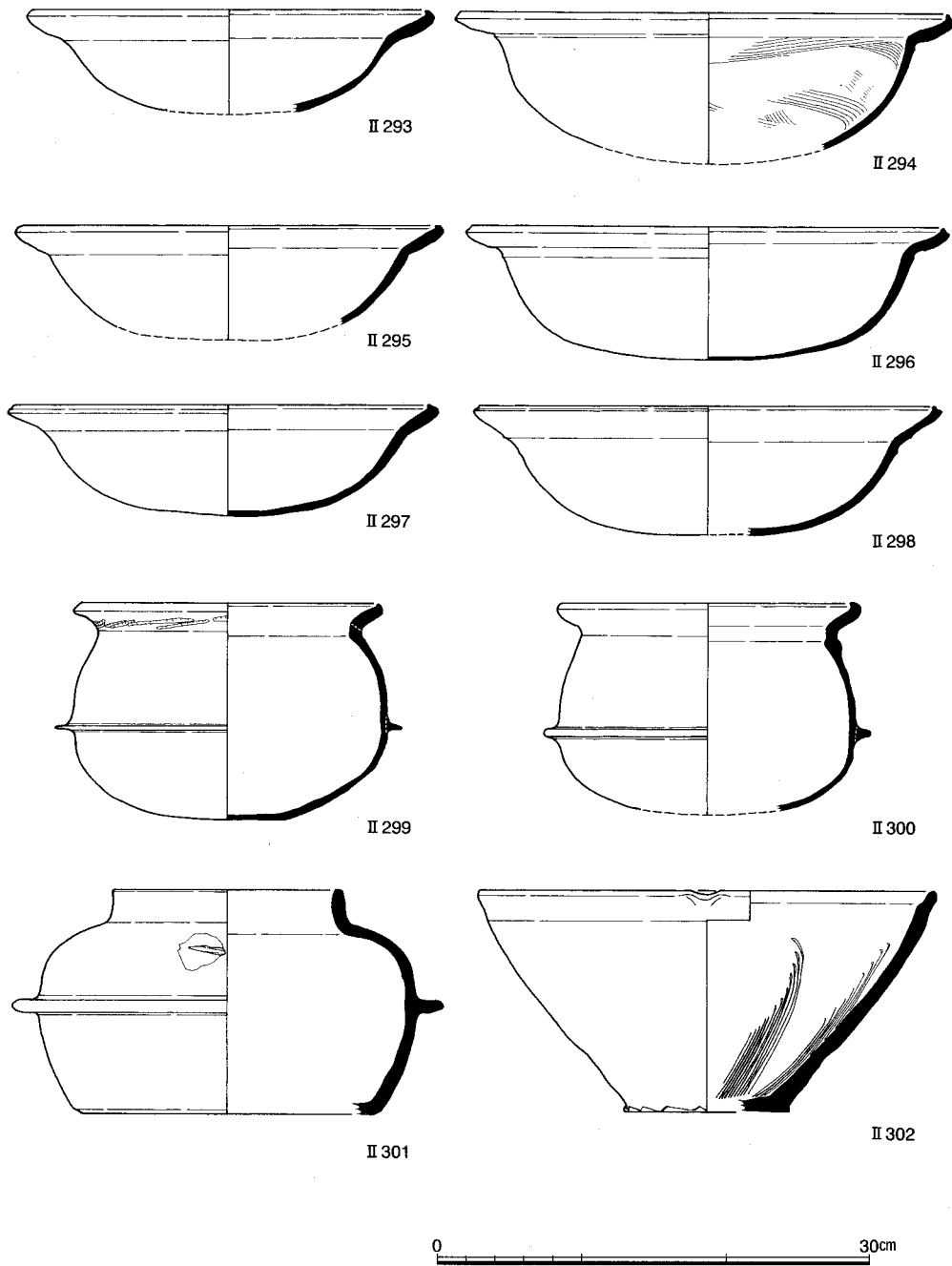


図58 S D 4 出土遺物(2) (II 293～II 300土師器, II 301・II 302瓦器) 縮尺1/5

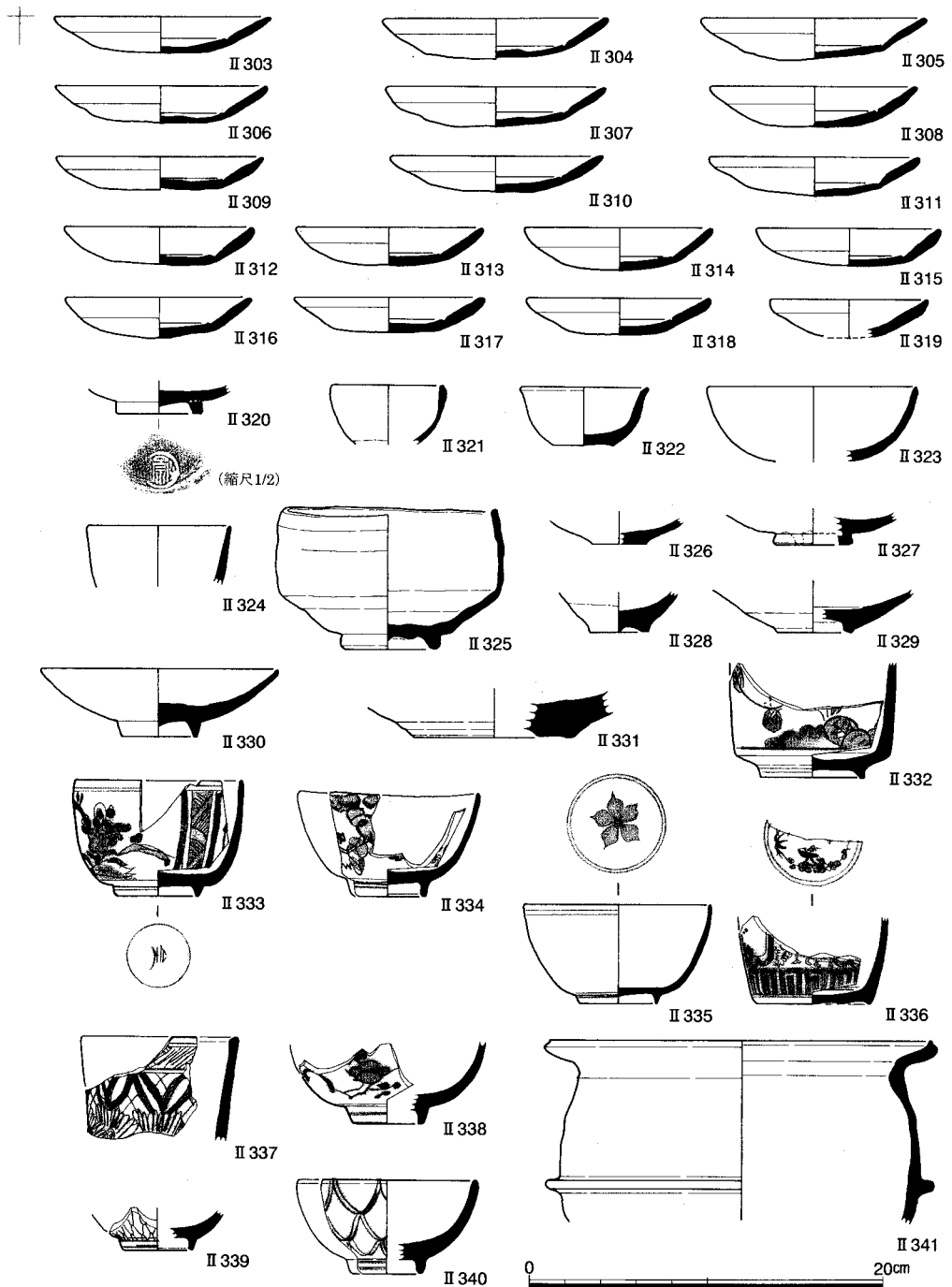


図59 S D 5 出土遺物 (II 303～II 320・II 341土師器, II 321～II 329陶器, II 330・II 331青磁, II 332～II 340染付)

Ⅱ 293～Ⅱ 300は土師器煮炊具。Ⅱ 293～Ⅱ 298は、いわゆる土鍋である。半球形の体部から口縁部が外へ開く形態で、口縁端部は内側へ突出させる。口径27～29cm、器高8cm前後と口径32～34cm、器高9cm前後の2つの法量が認められる。内外面とも丁寧に撫でて仕上げているが、Ⅱ 294は内面に刷毛目調整の痕跡が残り、Ⅱ 295の外面には叩きかと思われる痕跡がかすかに残る。口縁部外面および底部内面を中心に、炭化物の付着が著しい。Ⅱ 299・Ⅱ 300は、いわゆる土釜である。やや下ぶくれの球形の体部に外傾する口縁部がつき、体部中央に鑊をめぐらしている。口縁端部は内側へ突出させる。内面外面ともに撫でて仕上げており、Ⅱ 299の口縁部外面には棒状整形具による左下がりの圧痕がみられる。菅原正明の分類による大和Ⅰ2型である〔菅原83〕。Ⅱ 301は瓦器羽釜で、茶釜を模したとみられる形態を呈する。体上部に、水平方向に貫通孔をもつ把手の剥落痕跡がみられる。Ⅱ 302は瓦器すり鉢。口縁部内面やや下がった位置に段がつく。12条1単位のすり目をもつ。

S D 4 出土遺物は、17世紀前半の所産とみられるものが主体を占める。ただし、Ⅱ 272・Ⅱ 290のように、17世紀後半以降に下る遺物も少量ではあるが出土している。

Ⅱ 303～Ⅱ 341はS D 5 出土遺物。Ⅱ 303～Ⅱ 319は土師器皿。ほとんどが見込みに圈線をもつ皿で、Ⅱ 319のように圈線をもたないものはわずかである。圈線をもつ皿の口径は、11～12cmにピークをもち、圈線は断面レ字状を呈する。Ⅱ 320は轆轤成形の土師質碗ないし皿である。付け高台で、底部外面に銘をもつ。Ⅱ 321～Ⅱ 329は陶器の碗・皿類。Ⅱ 325は体部が屈曲する碗。口縁部は緩やかな波状を呈し、内面底部には、径8.5cmの茶溜まりをもつ。胎土は乳白色を呈し、鉄化粧を施した後、全面に黄緑色に発色する灰釉を掛けている。Ⅱ 328は唐津碗の底部。Ⅱ 330・Ⅱ 331は伊万里青磁の皿。Ⅱ 330は見込みを蛇の目釉はぎし、Ⅱ 331は蛇の目高台で畳付に鉄錆を施す。Ⅱ 332～Ⅱ 340は染付碗。Ⅱ 336は色絵染付の筒形碗で、蛇の目凹形高台である。Ⅱ 338は見込みを蛇の目釉はぎとする。花文の発色は悪く、濃褐色を呈する。Ⅱ 339は一重網目文、Ⅱ 340は二重網目文を描く。Ⅱ 341は土釜。外面に煤が薄く付着する。口径21.6cm。

S D 5 出土の土師器皿は、S D 4 出土遺物と比較して、口径の縮小や圈線の形状の変化などから、新しい様相を示している。また染付もⅡ 338～Ⅱ 340のように、18世紀に下るとみられるものも含んでおり、S D 4 よりは新しく、17世紀後半～18世紀前半の遺物を中心にするものと理解する。

Ⅱ 342～Ⅱ 348はS E 9 出土遺物。Ⅱ 342・Ⅱ 343は土師器皿。Ⅱ 342は口縁端部に煤が付着する。Ⅱ 344は土鍋。口径30cm前後で、口縁端部から内面にかけて、回転撫でで仕上げ

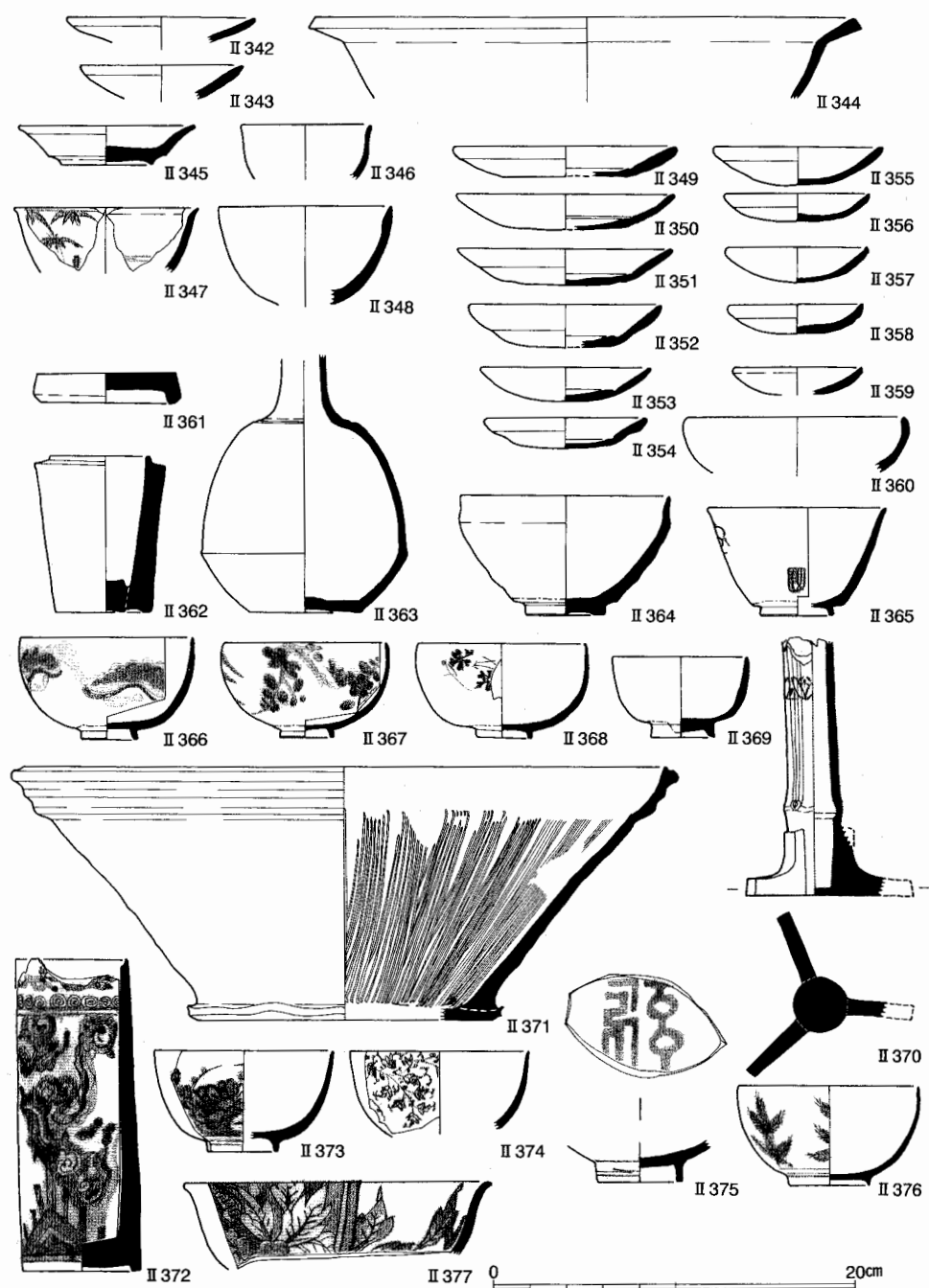


図60 S E 9出土遺物 (II 342～II 344土師器, II 345・II 346陶器, II 347染付, II 348青磁),
S E 7・8出土遺物 (II 349～II 362土師器, II 363～II 371陶器, II 372～II 377染付)

ている。Ⅱ345は瀬戸・美濃系の皿。淡緑色の釉を全面に施す。Ⅱ346は鉄釉を全面に施した小椀。Ⅱ347は竹笹文を描く染付椀。Ⅱ348は伊万里青磁の椀。

Ⅱ349～Ⅱ377はS E 7・8出土遺物。Ⅱ349～Ⅱ359は土師器皿。Ⅱ349～Ⅱ354は見込みに圈線をもつ。Ⅱ360は、回転台整形の土師器椀。Ⅱ361は焼塩壺の蓋。内面には布目痕を残す。Ⅱ362は焼塩壺の身。筒形で口縁端部に蓋受けの段をもつ。体部内面は型作りによる布の圧痕を残し、底部は小粘土塊を充填して作っている。刻印銘はみられない。口径5.2cm前後、最大径7.8cm、器高8.5cm。身、蓋ともに渡辺誠の分類によるB類である〔渡辺85〕。Ⅱ363は陶器壺。Ⅱ364は天目椀。Ⅱ365～Ⅱ368は京焼系陶器の椀。Ⅱ365は体下部に赤絵で銘をもつ。Ⅱ369は瀬戸・美濃系の小椀で、底部を除いて灰緑色の釉を施す。Ⅱ370

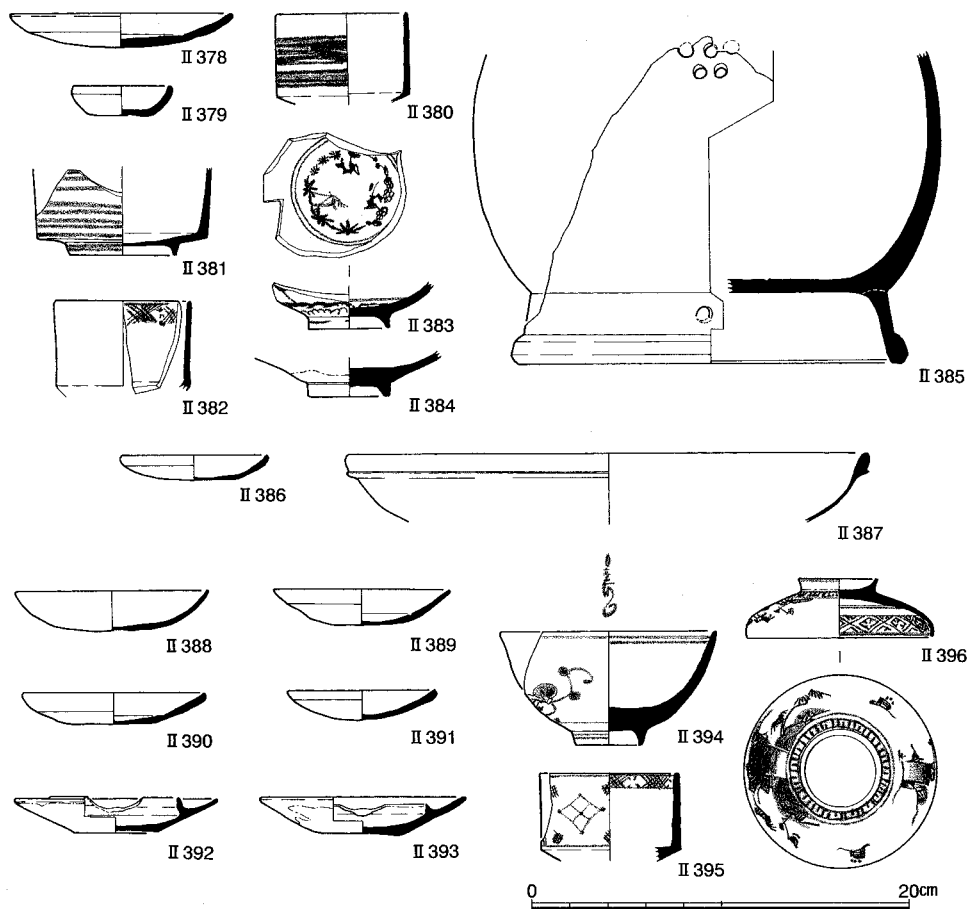


図61 S E 2 出土遺物 (Ⅱ378・Ⅱ379・Ⅱ385土師器, Ⅱ380陶器, Ⅱ381～Ⅱ383染付, Ⅱ384白磁),
S E 5 出土遺物 (Ⅱ386・Ⅱ387土師器),
S X 1 出土遺物 (Ⅱ388～Ⅱ391土師器, Ⅱ392・Ⅱ393陶器, Ⅱ394～Ⅱ396染付)

は細長い円筒の瓶の形態を呈する線香筒。竹を模しており、三足がつく。底面を除いて淡黄緑色の釉を施し、鉄絵で文様を描く。Ⅱ371は信楽のすり鉢。長石粒を多く含む黄褐色の胎土に、鉄泥を全面に施す。口縁部外面に2条の凹線を横走させて縁带状に作り、端面には1条の沈線を巡らしている。すり目は8条1単位で、見込みにも斜格子状に施している。

Ⅱ372は染付の花生。筒形の形態で、畳付のみ無釉とする。器高17.2cmをはかる。Ⅱ373～Ⅱ375は染付椀。Ⅱ373はコンニャク印判と手描きの文様を組み合わせで草花文で飾る。Ⅱ375は見込みに「福」の字をデザイン化して施す。Ⅱ376は底裏に「太明年製」の銘をもつ。Ⅱ377は青磁染付の鉢。外面には青磁釉を施し、内面は草木文で飾る。

S E 9 および S E 7・8 出土遺物は、18世紀前葉～中葉ごろのものであろう。

Ⅱ378～Ⅱ385はS E 2 出土遺物。Ⅱ378・Ⅱ379は土師器皿。Ⅱ380は陶器椀。Ⅱ381～Ⅱ383は染付。Ⅱ382は外面青磁釉をかけている。Ⅱ384は白磁で、見込みを蛇の目釉はぎとする。Ⅱ385は土師質の焜炉。外側端部が丸く肥厚する脚台がつき、胴部は内彎する。胴中央付近に、5穴以上からなる通風口をもつ。胴部上半には煤が付着する。

Ⅱ386・Ⅱ387はS E 5 出土遺物。Ⅱ386は土師器皿。Ⅱ387は土師器焙烙。口径28cmをはかる。Ⅱ388～Ⅱ396はS X 1 出土遺物。Ⅱ388～Ⅱ391は土師器皿。Ⅱ388は灰白色を呈し、回転台を用いて内面は撫で、外面は磨いて仕上げる。見込みとそれに対応する外面底部に、一辺約5cmの三角形に黒斑をもつ。Ⅱ392・Ⅱ393は陶器灯明受皿。Ⅱ394・Ⅱ395は染付椀、Ⅱ396は染付蓋。

S E 2・S E 5・S X 1 出土遺物は、19世紀前葉ごろのものであろう。

蓮月焼 幕末の歌人、大田垣蓮月が製作した、いわゆる蓮月焼がS K 4 およびその周辺の包含層からまとまって出土したので、一括して解説する。隣接するA F 19区の調査で、土坑から蓮月焼がまとまって出土しており〔浜崎・宮本87〕、また前章で報告したようにA R 25区で発見例があり、京都大学構内では3例目となる。

出土量は実測図として掲げた29個体のほかに、急須・煎茶椀・鉢・涼炉などの破片資料があり、全体で40個体前後になろう。資料の中には、破損した断面に釉が流れているもの(Ⅱ424)、ひび割れにより施釉していない面に釉が流れ出たもの(Ⅱ406)、焼成時に生じたと考えられるひび割れをもつもの(Ⅱ400・Ⅱ407)などがあり、完形品はない。これらの出土資料は、焼き損ない品を捨てたものとする。胎土は陶土を用い、無釉で焼き締めるものと施釉して仕上げるものがある。成形は手づくねによるものであり、釘彫りあるいは筆を用いて、自詠の和歌を書き込んでいる。

AG20区の遺構と遺物

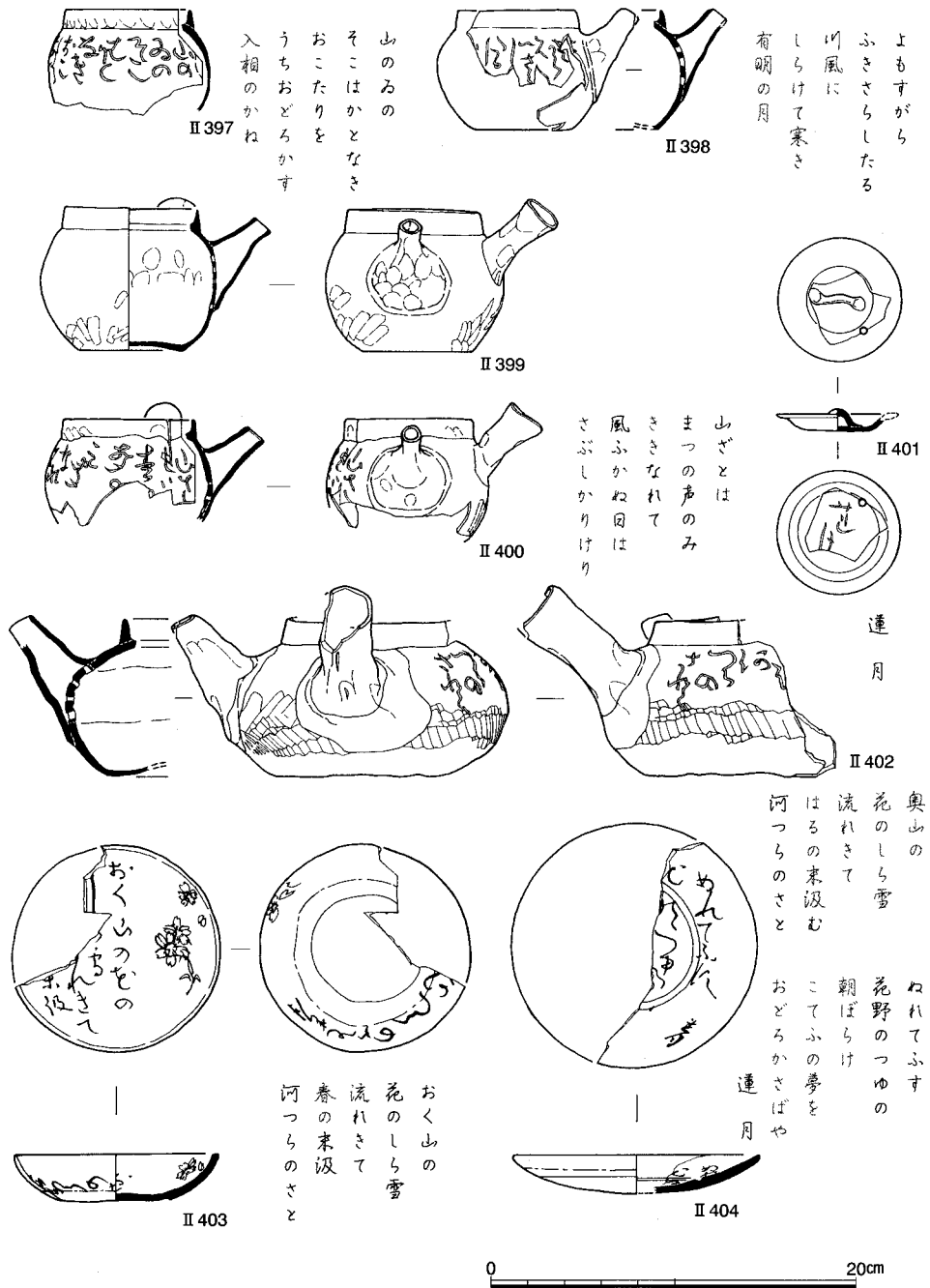


図62 蓮月焼(1) (II 397~II 400急須, II 401急須蓋, II 402湯瓶, II 403・II 404皿)

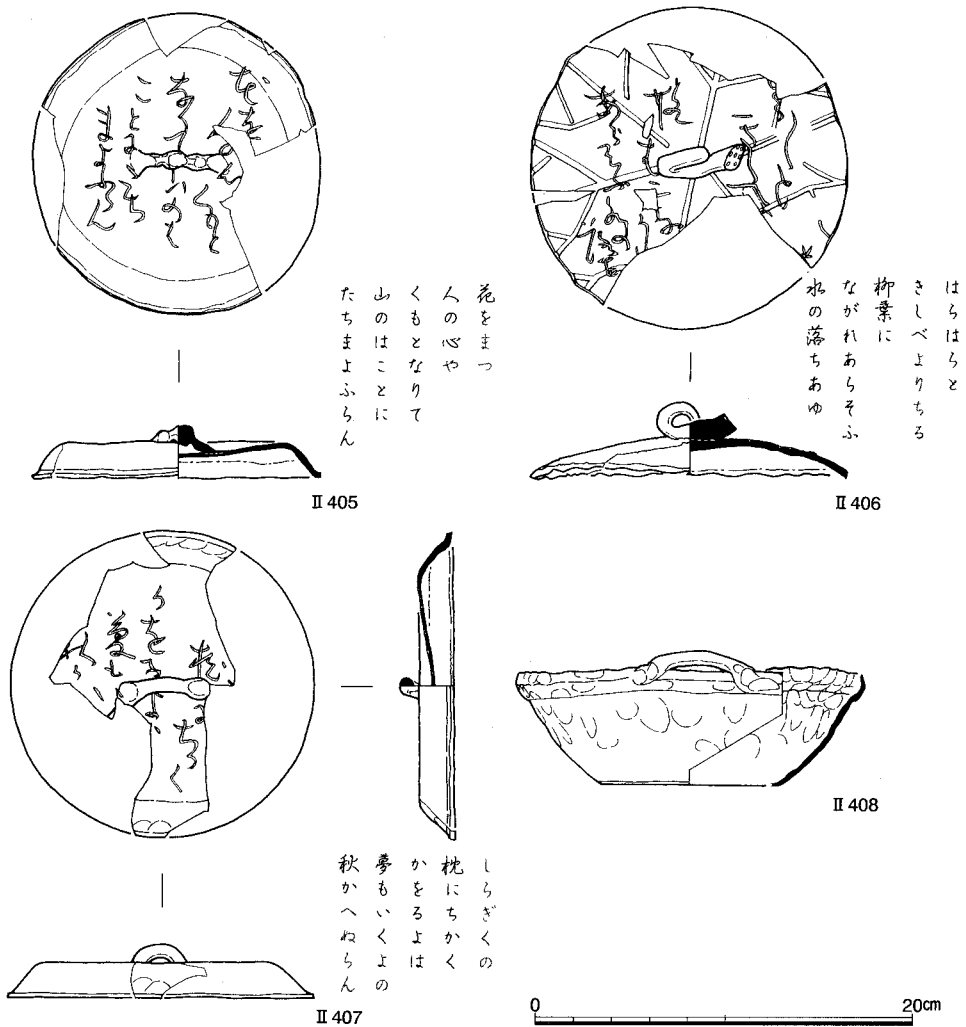


図63 蓮月焼(2) (II 405 ~ II 408蓋物)

なお、蓮月焼最大の特徴である和歌全文が残存している資料は1点もみられなかった。そこで、書き込まれた歌を復元するために、現在に伝えられている蓮月の和歌979首をもとにデータベースを作成し、出土資料から判読できる歌の一部と一致する配列をもつものを検索して和歌の復元をおこなった。濃度を落としてある箇所が推定部分である。

出土した資料は、煎茶における茶席の道具が主体を占めている。II 397 ~ II 400は急須、II 401はその蓋である。II 397・II 398・II 400は、焼き締めによる焼成で、釘彫りで歌を刻む。II 400は外面全体に自然釉がかかる。II 399・II 401は灰白色を呈し、焼きがamai。

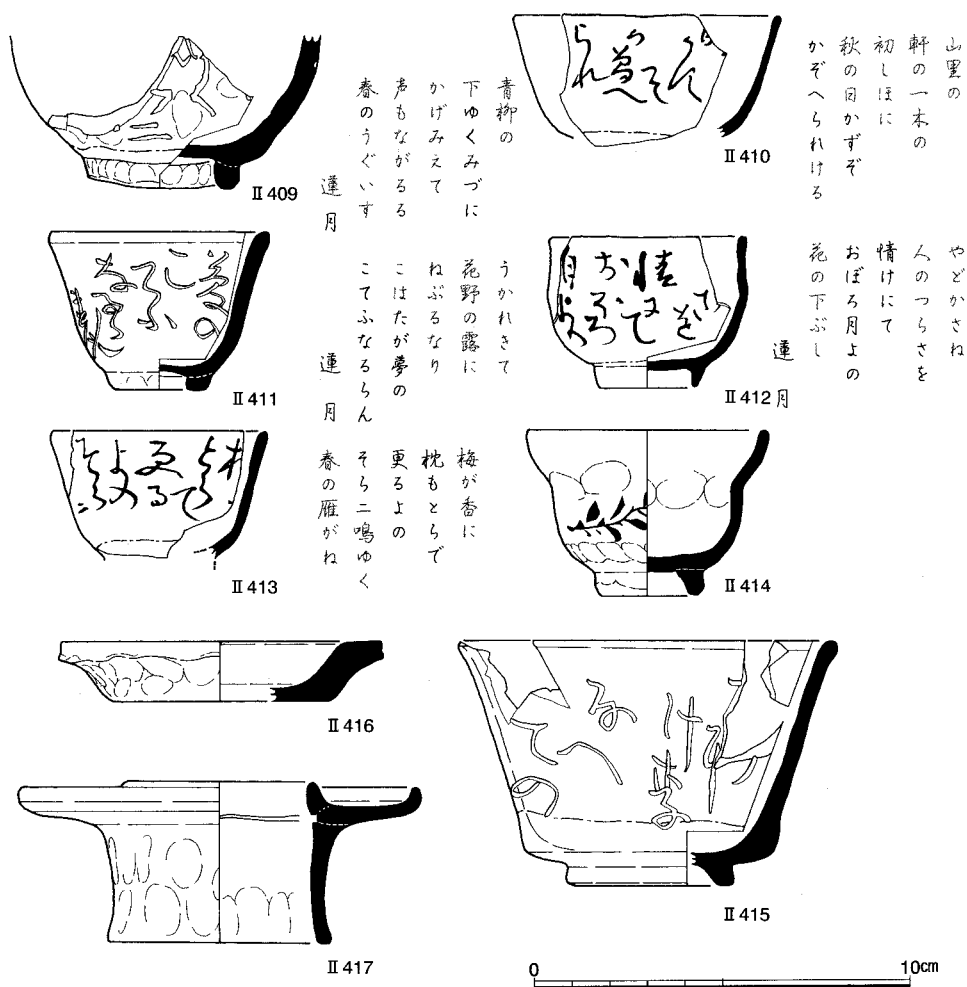


図64 蓮月焼(3) (II 409～II 414碗, II 415鉢, II 416・II 417茶托) 縮尺1/2

II 401は、裏面に「蓮月」の銘を釘彫りする。II 399は和歌を筆書きし、施釉して仕上げるための素焼きの段階の可能性もある。

II 402は焼き締めによる湯瓶で、釘彫りで歌を刻む。急須・湯瓶に刻まれた和歌は、注ぎ口の向かって左側からはじまり、把手の向かって右側で収まるように配列されている。これは客席に対する正面を意識した結果であろう。

II 403・II 404は皿。II 403は、筆書きで桜花の図と賛をつける。和歌は見込みから始まって体部外面でおわり、「蓮月」の銘をもつ。底部外面を除いて施釉する。II 404は、見込みに圈線がめぐり、同時代の土師器皿の形態を模倣している。筆書きによる和歌を見込み

に配し、口縁部外面から見込みにかけて施釉する。

Ⅱ 405～Ⅱ 408は蓋物の類で、Ⅱ 405～Ⅱ 407は蓋、Ⅱ 408は身である。Ⅱ 408は2箇所に橋状把手のつく鉢で、内外面に指押さえによる整形の痕跡が顕著に残る。淡橙色を呈し、焼きがあまりことから、施釉するための素焼きの可能性もある。Ⅱ 405～Ⅱ 407は上面に釘彫りで和歌を刻み、内面にⅡ 405・Ⅱ 407は透明釉、Ⅱ 406は白色の釉を施す。Ⅱ 406は蓮の葉と地下茎をかたどっている。

Ⅱ 409～Ⅱ 414は椀。口径5～7cm、器高4～4.5cmのⅡ 410～Ⅱ 414は煎茶椀である。Ⅱ 411のみ無釉で、それ以外は底部外面を除いて施釉する。Ⅱ 409は、釘彫りで和歌と「蓮月」の銘を刻んでいる。Ⅱ 410・Ⅱ 412・Ⅱ 413は筆書きで和歌をしるす。Ⅱ 414も筆書きで草文を描く。口縁部から体部は、12分の1程度しか残存していないので、この資料にも和歌を詠んだ可能性が残る。Ⅱ 411は釘彫りで和歌と「蓮月」の銘を刻む。灰白色から灰色を呈し、焼きがあまりいため、施釉のための素焼きかもしれない。

Ⅱ 415は、上面観が方形になる鉢で、底部外面を除いて施釉する。この例のみ、和歌を判読できなかった。蓮月焼ではないかもしれない。Ⅱ 416・Ⅱ 417は茶托であろう。いずれも無釉で、Ⅱ 416は淡橙色、Ⅱ 417は灰白色を呈し焼きがあまりいので、施釉前の素焼きの可能性が高い。Ⅱ 416は底面は磨いて平滑な面としている。

Ⅱ 418～Ⅱ 421は、蓋（Ⅱ 418・Ⅱ 419）と身（Ⅱ 420・Ⅱ 421）がセットをなす焼き締めของ香合。蓋は亀をかたどっている。身の底部には、釘彫りで「蓮月」の銘を刻む。蓋、身ともに側縁を3～4箇所刻んでいる。紐かけの工夫であろうか。蓮月尼65歳ごろの作とされる伝世品に酷似する〔京都府立総合資料館編84, p.8〕。

Ⅱ 422は焼き締めによる壺形の容器。外面には部分的に自然釉がかかる。釘彫りによる歌をもつ。口径8.5cm前後、胴部最大径12.8cm、器高10.6cmをはかる。Ⅱ 425も同様の形状の胴下半から底部の資料。無釉で釘彫りによる歌をもつ。淡橙色を呈し焼成はあまり。茶席の道具であるとすれば、水指あるいは建水などに使用されるものであろうか。

Ⅱ 423は涼炉。円筒形の胴部とさなの部分は、別々に製作して接合している。口縁部内面には瓶掛けが3箇所つき、胴部下半に長方形の窓があいて舌状の灰出しがとりつく。素焼きで淡橙色を呈する。釘彫りで、和歌と「蓮月」の銘を刻む。

Ⅱ 424は口径23cm前後、器高22.4cmをはかる。三足になる脚のうち、1個を欠損する。脚部には小孔をもつ。底部を除く外面に淡青色の釉をかける。「蓮月」の銘をもつが、欠損により和歌は残存しない。内部に五徳を置いて用いた火炉と思われる。

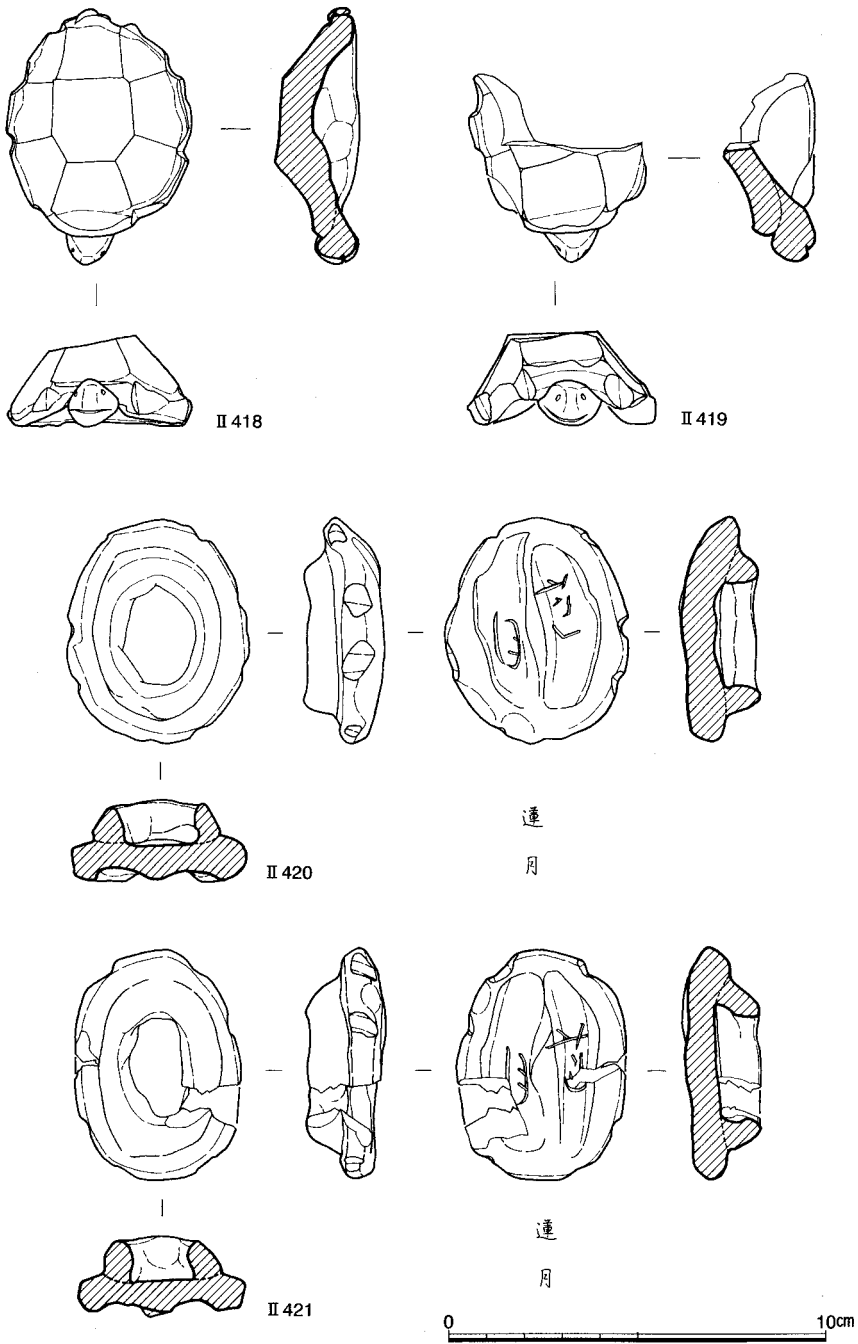


図65 蓮月焼(4) (II 418~II 421香合) 縮尺1/2

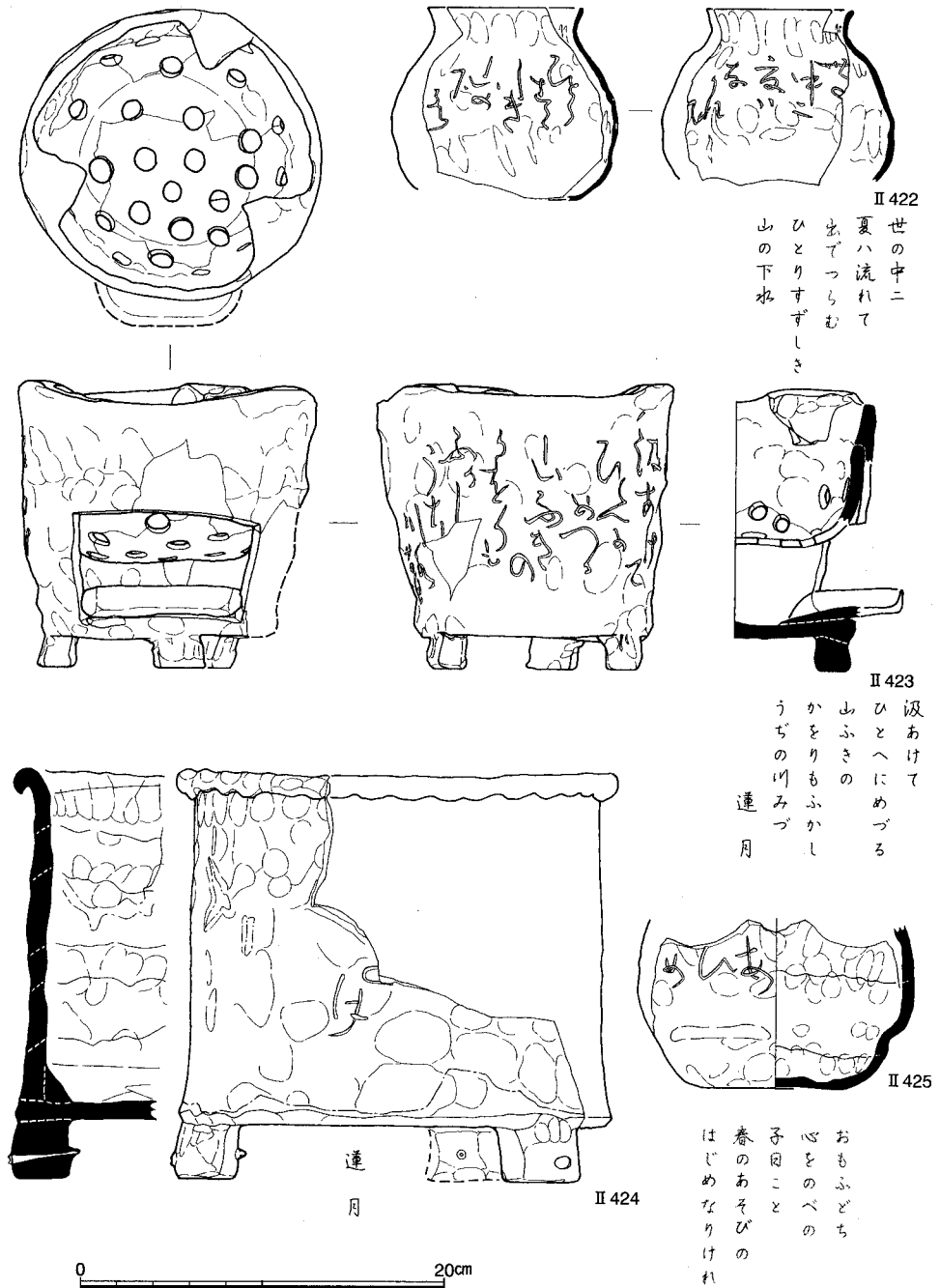


図66 蓮月焼(5) (II 422・II 425壺形, II 423涼炉, II 424火炉)

3 A F 20区の遺構と遺物

(1) 層 位 (図67)

地表面の標高は、調査区東北端で48.7m、南西端で48.1mをはかり、南西に向かって緩やかに傾斜する。調査区の基本層位は、上から表土（第1層）、暗灰褐色土（第2層）、明褐色土（第3層）、灰茶褐色土（第4層）、淡褐色土（第5層）、礫混じり灰褐色土（第6層）、瓦混じり灰褐色土（第7層）、青灰色粘土（第8層）、灰褐色土（第9層）、瓦混じり灰褐色粘質土（第10層）、黄灰色シルト（第11層）、赤褐色砂礫（第12層）である。

第2層と第3層は近代の造成土である。第4層から第10層までは江戸時代の堆積物で、18世紀の遺物を多量に含む。このうち第6～8層は流路S R 1の埋土であり、底に堆積する第8層は自然堆積層、拳大から人頭大の礫や多量の瓦を含む第6層と第7層は人為的な堆積層である。また、S R 1に切られる第10層は、Y=1997付近で土取穴を切って立ち上がっている。S R 1以前の流路堆積物とみられるが、肩部を一部検出するにとどまった。

第11層および第12層は、前節A G 20区の第8層、第9層にそれぞれ対応する堆積物である。黄灰色シルトは土取りの対象となった土層であり、本調査区ではほとんど残存していなかった。

(2) 遺 構 (図版23, 図68)

中世の遺構 本調査区で検出した中世の遺構として、井戸S E 1がある。後世の土取りによって上部は破壊されていたが、井戸側の最下部と水溜は比較的良好に残存していた。掘形は円形、井戸側は縦板を横棧で押える構造で、水溜に曲物を設置している。裏込めには、小児頭大の礫を充填していた。井戸底の標高45.8mをはかる。井戸底の埋土からD₂・D₄類の土師器皿が少量出土した。13世紀前葉ごろのものであろう。

調査区の東半を中心に黄灰色シルトを掘り込んだ不整形の土坑が多数検出された。シルトの下層に堆積している赤褐色砂礫に達すると掘削をやめていることから、シルトの採取を目的とした土取穴と理解できる。遺物がほとんど出土していないため、年代の特定は難しいが、中世前半（13世紀）のS E 1を破壊し、近世後半（18世紀）の遺構に切られていることから、中世後半～近世前半の時間幅にはおさまるだろう。

近世の遺構 池・溝・流路・杭列などを検出した。池S G 1は、西に隣接するA F 19区で見つかっていたS G 1と一連のものであり、今回の調査によって、南北約16m、東西約15mの規模をもつ不整形の池で、東北の隅にS G 1に流れ込む溝S D 1がとりつくこ

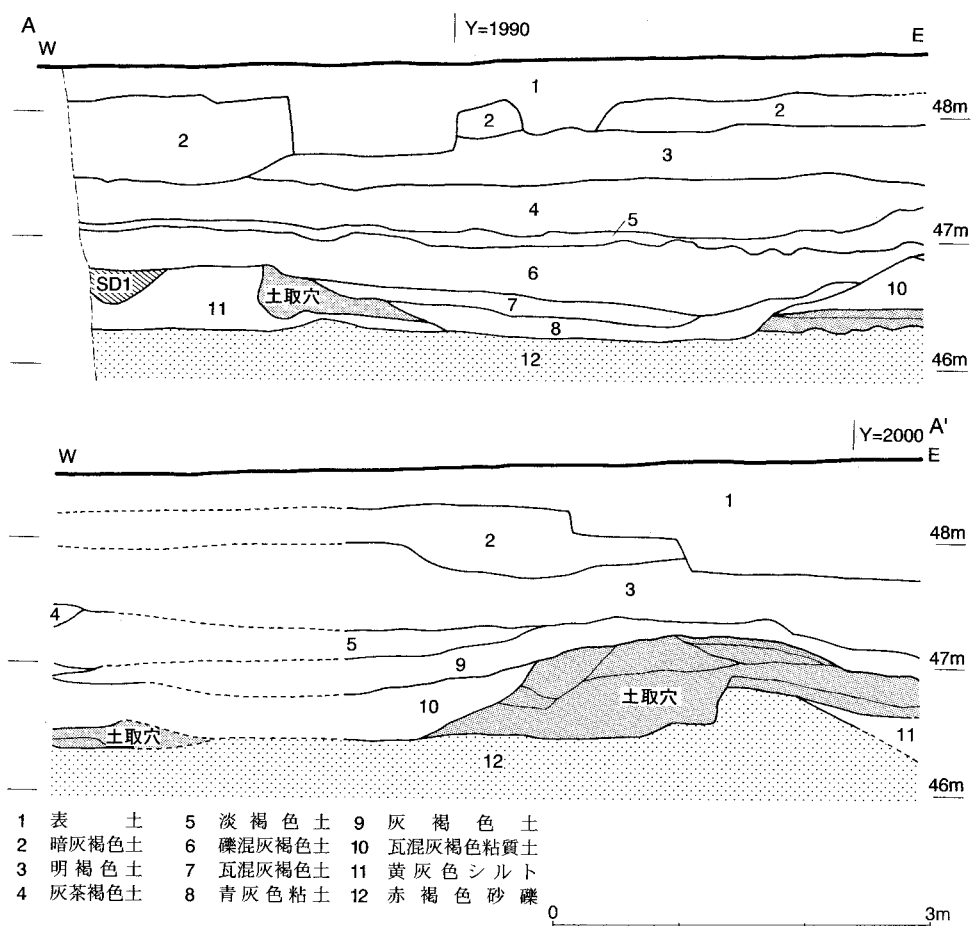


図67 A F 20区の層位 縮尺1/60

とが判明した。A F 19区では、護岸として厚さ1 mにおよぶ石組みがみられたが、今回検出した東岸部分には、そうした施設はみられなかった。ただし、直径7 cm前後の杭が30 cm～50 cmの間隔で、4本打ち込まれている箇所があり（S A 3）、護岸にかかわる何らかの施設があった可能性はある。また、北端の取水口部分からは、口径5～6 cmの小型の土師器皿が完形でまとまって出土した。

溝S D 1は、幅80 cm、検出面からの深さ30 cm前後をはかり、北端は調査区外へと続いている。東に接する流路S R 1との位置関係からみて、調査区の北方部分でS R 1にとりついていたと推定できる。S R 1から取水し、S G 1へと配水したのであろう。

S R 1は北から南へ流れる流路で、幅約4 m、検出面からの深さ約60 cmをはかる。調査

A F 20区の遺構と遺物

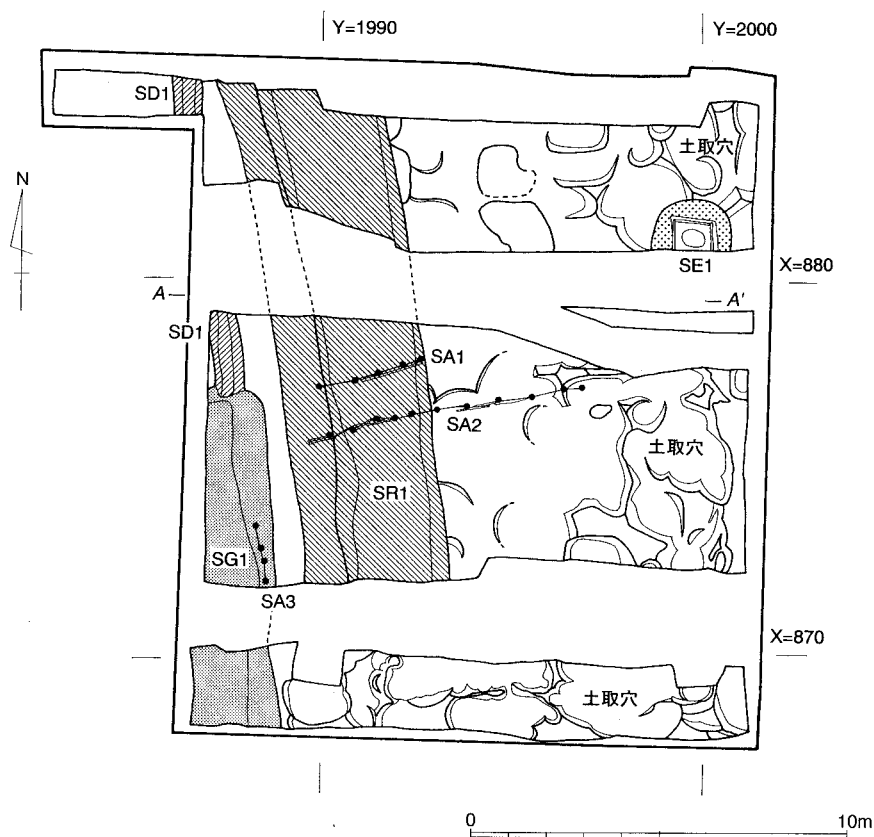


図68 A F 20区検出の遺構 縮尺1/200

区南辺では、後世の攪乱のために検出できなかったが、南北ともに調査区外へと続いている。前述したように、多量の瓦礫によって埋積している。

杭列は3基検出した。SA1・2はSR1を横断する形で設置されていた。SA1は、直径6cm前後の杭5本からなり、SR1東側肩から西側の立ち上がりにかけて、40～80cmの間隔で打ち込まれていた。SA2は、直径6～10cmの杭11本からなり、SR1西側立ち上がりからSR1の東側4mの地点まで、40～80cmの間隔で打ち込まれていた。SA1には横木が置かれており、SA2には竹材を8字状に横に渡してあった。構造的にみて、SA1・2はしがらみ状を呈するが、1.2m前後の間隔で併行していることから、簡単な構造の橋であった可能性もあろう。SA3は、前述のように、SG1の東岸に設けられており、護岸にかかわる施設であったと思われる。

(3) 遺物 (図版35～37, 図69～71)

SG 1 出土遺物 II 426～II 453は土師器皿。見込みに圈線をもつII 426～II 435と圈線をもたないII 436～II 453に大別できる。圈線をもつ皿は、II 428～II 435の口径10cm前後のものが主体を占め、II 427の口径12cm前後のもの、II 426の16cmをこえる大型のものがわずかにみられる。圈線の断面はレ字状を呈するものが多い。圈線をもたない皿は、II 436～II 443の口径8cm前後のものとII 444～II 453の口径5～6cmのものに分けられる。圈線をもつ皿と圈線をもたない口径8cm前後の皿には、口縁端部を中心に煤が付着するものが見られる。

II 454は土師器碗。回転台を用いて、外面は磨き、内面は横撫でによって整形されている。灰白色を呈し、底部外面は黒変している。II 455は、回転台整形の土師器皿。灰白色を呈する。見込みに型押しで、鶴・亀・松・竹・梅からなる蓬莱文様をもつ。和鏡の型を転用している可能性がある。II 456は土師器焙烙。口径28.2cm, 器高6.3cmをはかる。底部を外型で成形しており、口頸部との接合の痕跡が外面に明瞭に残る。内面と口縁部外面を回転撫でで仕上げている。難波洋三による分類のG類である〔難波89b〕。

II 457は土師器で、胎土に雲母が目立つ。口径12.4cm, 器高3.8cm。体部からいったん内側に屈曲した後、短い口縁部が外へ開く。底部は丸底となる。II 456と同様に底部は外型作りで、口頸部を接合した後、内面から口頸部にかけて回転撫でで仕上げている。底部外面が変色し、薄く煤が付着していることから、焙烙の一種とみてよいと思われる。

II 458・II 459は焼塩壺。口径3cm前後, 器高は6cm前後である。口縁部が内傾してすばまる形態で、口縁部内外面を、横撫でで仕上げている。渡辺誠による分類のF類である〔渡辺85〕。

II 460～II 471は陶器。II 460は灯明皿。見込みから口縁端部にかけて施釉する。口縁部内面に、ボタン状の貼り付けをもつ。II 461は仏飯。底面を除いて、灰緑色の釉をかける。II 462は口縁部が端反りになる瓶。櫛描きによる横線で器面を3分割し、上下方向の櫛描文を充填している。外面には自然釉がかかる。II 463は唐津系碗。外面は白泥、内面は白泥と鉄釉を刷毛塗りしている。II 464は半筒形の碗。口縁端部と底部外面を除いて、灰緑色の釉を施す。II 465は輪層形の碗。胎土は赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。内面と口縁部外面に白泥を塗り透明釉を施し、草花文をあしらう。

II 466～II 469は京焼系の碗と鉢。II 466とII 467は半球形の碗で、II 466は鉄釉で文様を施す。II 467は色絵で、菖蒲文を描く。II 468とII 469は器高の低い丸形の鉢。見込みに色

A F 20区の遺構と遺物

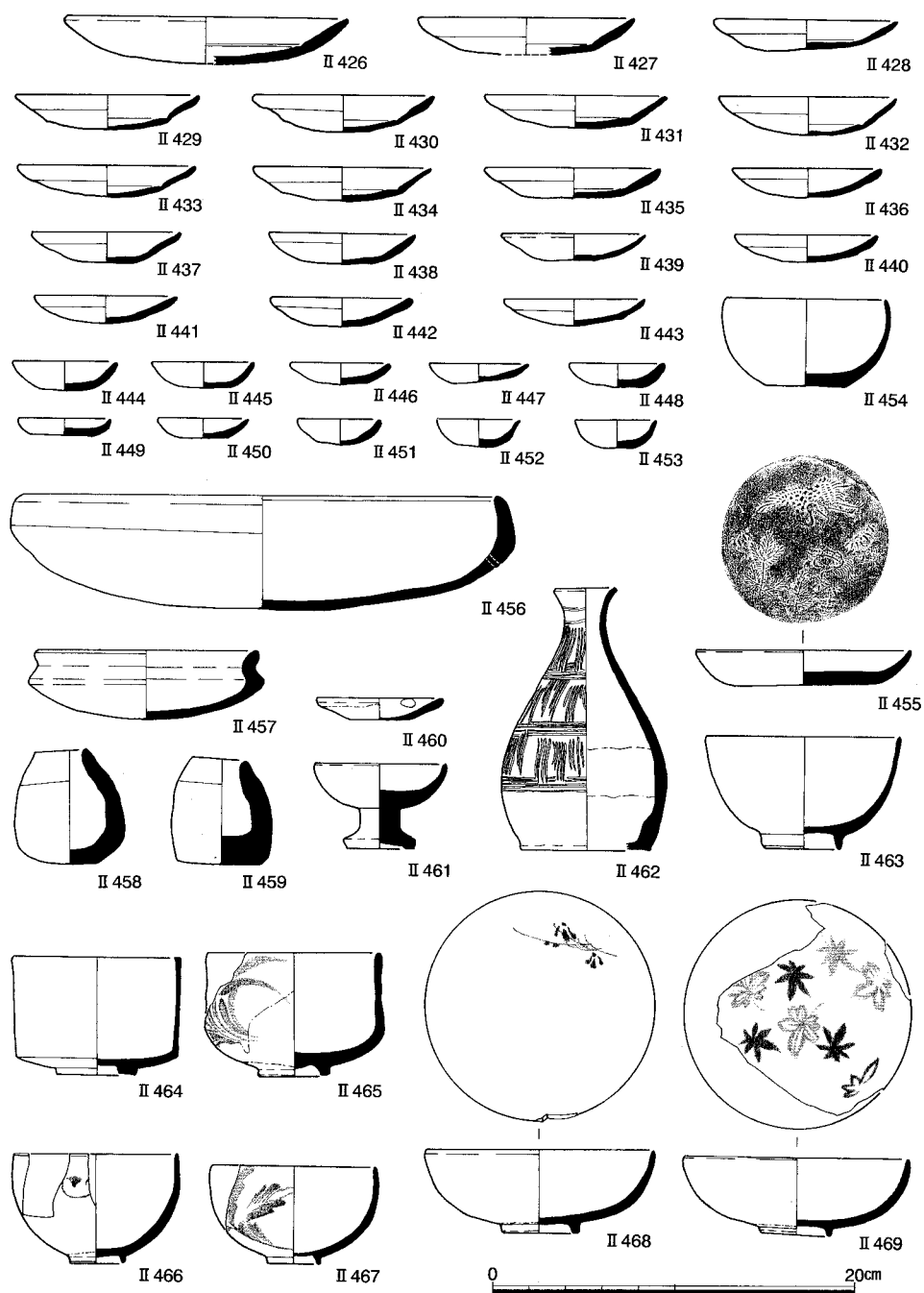


図69 SG 1出土遺物(1) (II 426~II 459土師器, II 460~II 469陶器)

絵で文様を描く。Ⅱ470は片口。胎土は乳白色を呈し、底部外面を除いて灰釉を施す。Ⅱ471は鉄釉土鍋。口縁部の2箇所に紐状の把手があり、その一方には注ぎ口が口縁下にとりつく。底部には三足がつき、底部外面には煤が厚く付着する。

Ⅱ472～Ⅱ484は磁器染付。Ⅱ472～Ⅱ475は丸形碗、Ⅱ476は半筒形碗である。Ⅱ474は「太明成化年製」、Ⅱ475は二重方形枠内に「渦福」の底裏銘をもつ。Ⅱ477は半筒形の鉢。口縁部内面を無釉にする蓋物である。Ⅱ478～Ⅱ481は皿。Ⅱ479は口銹を施し、内面は墨弾きの技法で波文を描く。Ⅱ481は見込みにコンニャク判で龍文を描く。Ⅱ482・Ⅱ483は碗蓋、Ⅱ484は蓋物の蓋である。Ⅱ482はコンニャク判で文様を描く。Ⅱ483は見込みに五弁花文をもつ。

これらS G 1から出土した遺物は、18世紀中頃を中心とする時期のものであろう。

S R 1 出土遺物 Ⅱ485・Ⅱ486は土師器皿。口径9.5cm前後で、見込みに圈線をもつ。Ⅱ487・Ⅱ488は焼塩壺。Ⅱ487は、筒形で口縁端部に蓋受けの段をもつが、痕跡的である。胴部を板作りし、底部に粘土塊を充填している。刻印はみられない。器高8.1cm, 最大径6.8cm。Ⅱ488は筒形で、回転台を用いた撫で仕上げ。刻印はみられない。器高6.4cm, 最大径7.1cm。Ⅱ487はC類, Ⅱ488はJ類に比定できよう〔渡辺85〕。Ⅱ489は広口の陶器壺。胎土は黄白色を呈し、外面に鉄泥を施す。

Ⅱ490～Ⅱ492は磁器染付。Ⅱ490・Ⅱ491は碗。Ⅱ490は外面を暦字文で飾り、見込みにくずした「壽」の文字をもつ。Ⅱ491は半筒形の碗で、口縁部内面に四方櫛文を描いている。Ⅱ492は皿。見込みに五弁花、「渦福」の底裏銘をもつ。

S R 1から出土した土師器皿は、S G 1と比較して、法量がわずかに小さく後出的である。染付の年代観ともあわせると、このS R 1出土遺物は、18世紀後葉のものが中心と理解する。

埴 塼 本調査区東北隅の第9層から集中的に出土し、S G 1からも少量出土した埴塼について、代表的なものの実測図を掲げて解説を加えておきたい。底部で個体識別をすると、20個体前後の出土点数となる。法量や注口の有無で、大きく2つに分類することができる。

A類(Ⅱ493・Ⅱ495)は、筒形で高さが30cmをこえ、注口のつくもの。「梅干壺」と呼ばれる大型の埴塼である〔葉賀90〕。上面観は楕円形で、上方にゆくに従って偏平の度合いが強くなる。注口部は、中央やや上よりの位置につき、注口の反対側の外面は、径3～4cm, 深さ2cm前後凹んでいる。

A F 20区の遺構と遺物

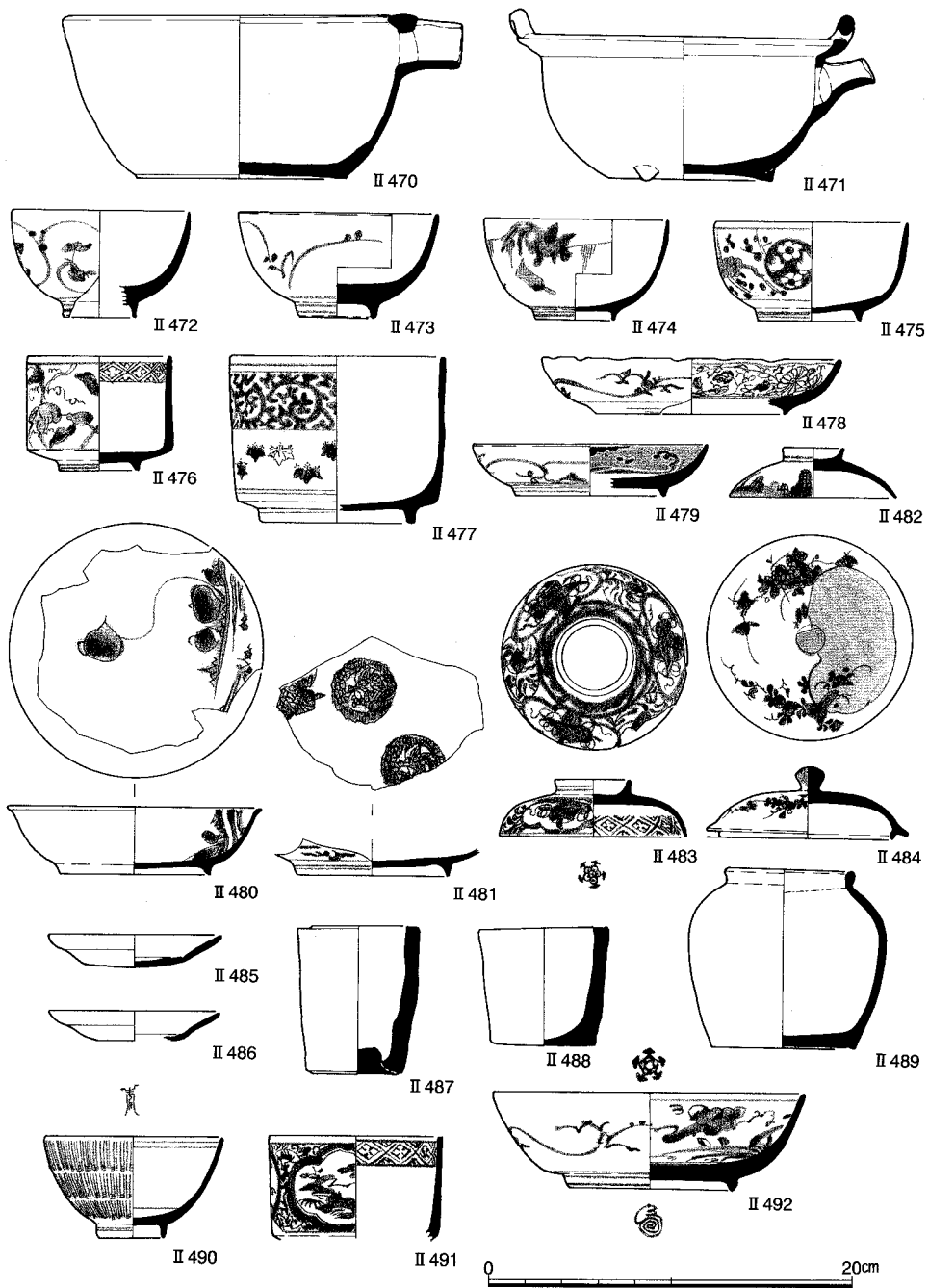


図70 SG 1 出土遺物(2) (II 470・II 471陶器, II 472～II 484染付)

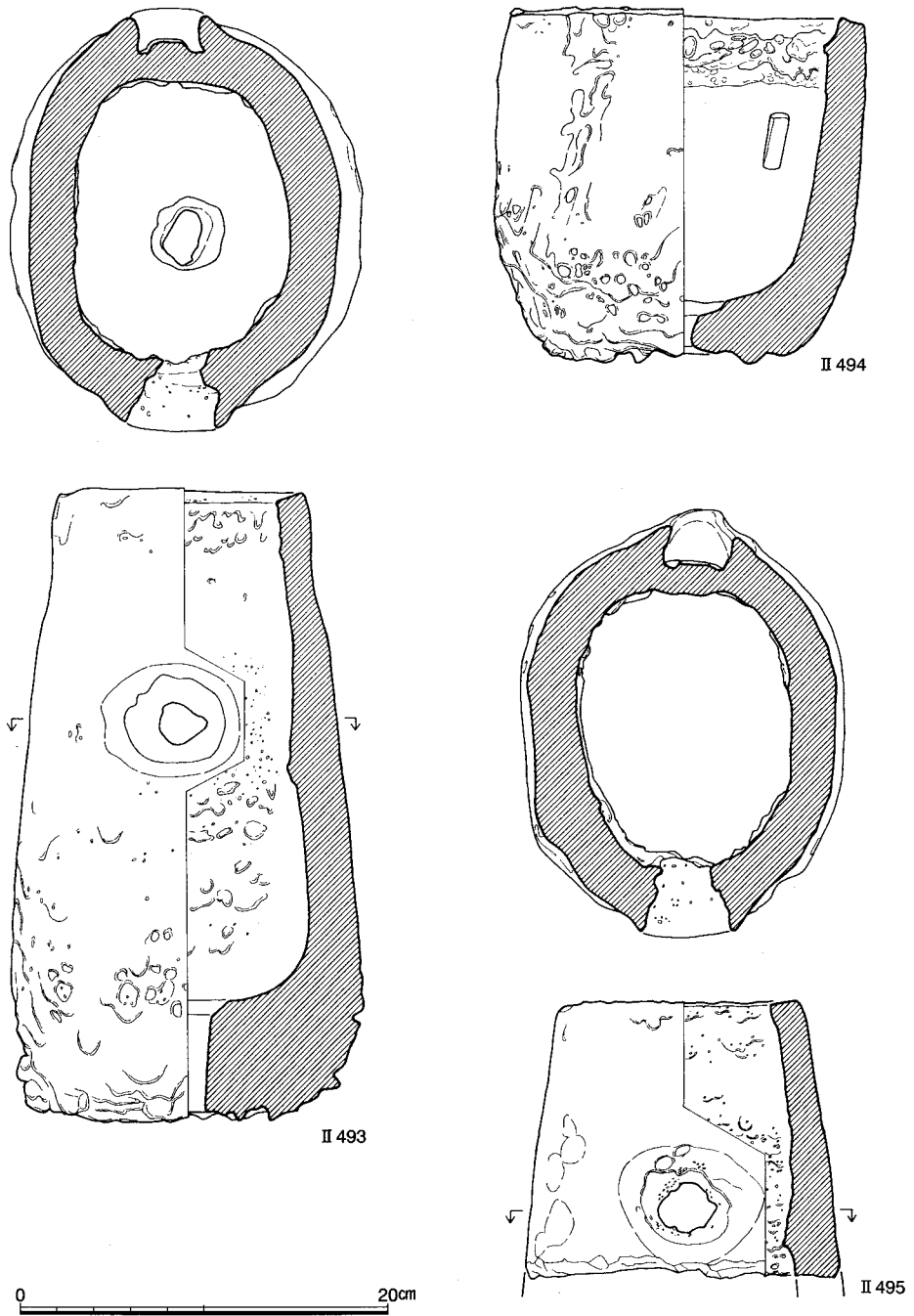


図71 埴 塼 (II 493・II 494灰褐色土出土, II 495 S G 1 出土)

江戸時代の銅精錬の案内書である『鼓銅図録』〔増田・丹羽1801〕には、職人が埵塙を「ユトリハシ」で銕んで、溶銅を流し出している様子が描かれた図が見られる(図72)。外面にある凹みは、「ユトリハシ」を引っかけて固定するためのものと考えることができる。

A類の大部分は、Ⅱ495のように注口部直下の部分で切断されており、全形のわかる資料はⅡ493のみである。

B類(Ⅱ494)は、半筒形で高さ20cm以下で注口をもたないもの。Ⅱ494の1例のみ。上面観は楕円形を呈し、口縁部内面に、長方形の凹みが2箇所みられる。この凹みも、「ユトリハシ」を引っかけるためのものかもしれない。

A類、B類ともに内面から口縁端部にかけて溶融し、付着物がみられる。外面は二次的な熱のために、赤紫色や黒褐色に変色し、下半部を中心にガラス質化している。底面には木炭が嚙んでいた痕跡が認められるので、据え置いて用いたのであろう。緑青が観察できる個体があることから、銅の精錬に用いた埵塙であることがわかる。また、底部には直径1.5～3cmの穴があくが、断面は溶融しておらず二次的な穿孔である。

こうした大型の埵塙は、花生けとして華道の世界では珍重されてきたらしい〔葉賀90〕。今回発見された埵塙の底部には、すべて穴があげられており、またA類は注口直下で切断されたものがほとんどであった。また、注口直下で切断するために、外面に鑿で筋彫りを施した破片もSG1から出土している。SG1からは、切断され不要になった上部のみ出土し底部の残る資料が出土しておらず、集中して発見された調査区東北隅からは、逆に切断された上部や切断途上の資料は出土していない。

こうした出土状況を勘案すると、これらは植木鉢として転用するために、調査区付近で切断、穿孔がなされた後、不要な上半部はSG1へ捨てられ、下半部が調査区東北隅に集められた後、遺棄されたものであると考える。SG1出土遺物の年代から判断して、18世紀中頃のものであろう。



図72 埵塙の使用状況
(『鼓銅図録』江戸科学古典叢書1より)

4 小 結

病院構内でおこなわれた既往の調査成果にも目を配りつつ、今回の発掘調査の成果をまとめ、結びとしたい。

先史時代の遺跡と遺物 従来の調査成果から、病院構内一帯は現在の鴨川東縁部にあたり、先史時代には、高野川系や白川系の河川が北から南へ流れる低地部を形成していたことが明らかになっている。今回の調査でも、A G 20区東調査区で縄文・弥生時代の旧流路（S R 2～7）がみつかった。また調査区一帯の基盤は、高野川系とみられる赤褐色砂礫からなり、A G 20区東調査区とA F 20区では、この砂礫の上に黄灰色シルトが堆積していたが、A G 20区西調査区にはみられなかった。シルト層は、医学部構内から病院構内東辺に分布し、土取りの対象となった堆積物であり、高野川系流路がつくった凹地が滞水域となって形成されたものと考えられている〔清水91〕。

旧流路やその溢流堆積物からは、縄文後期、弥生前～後期の土器が総計約400点出土した。大半は小破片で流路内から出土しているので、遺物の存在がただちにこの地での活動の痕跡を示すとは言えないものの、全体的に摩滅の少ないものが多いので、遠方からの流れ込みとは考えにくい。とくに縄文後期の土器はまとまっており、溢流堆積から出土しているⅡ1～Ⅱ4のように、器形が復原できる良好な資料も得ている。

病院構内の複数の調査地点から縄文土器が出土すること、本調査区の北に隣接する191地点で白川系流路の肩部に遺棄された縄文後期土器がみつかったこと、本調査区の東200mにある聖護院遺跡では、後期土器・石器など遺物とともに土坑がみつかったことなどから、白川扇状地の西南端にあたる聖護院付近を中心に後期前葉の集落が営まれ、病院構内にあたる低地部でも、自然堤防や微高地上には縄文人の活動が及んでいたと想定してきた〔千葉91〕。今回の出土状況も、それを補強する成果といえる。

縄文後期土器の大半は、北白川上層式2期に比定できる。このうち、文様構成と器形が復原しうるⅡ1とⅡ4は、型式学的に重要な資料となろう。Ⅱ1は、口縁部に刻目隆帯が横走し、胴部上半に三角形文を描いており、関東地方の堀之内2式の文様に類似する。胴部が屈曲する器形も、堀之内2式前半に特徴的なものであり、系統論的には「関東系」と理解できる。ボウル形の浅鉢であるⅡ4は、上下2段の文様構成で、上段は三角文とJ字文、下段は長方形区画文とJ字渦卷文からなる。単純な器形の浅鉢で、文様構成が2段になる例はきわめて珍しい。上段の三角形文は、Ⅱ1の文様意匠に類似するものの、三角形

の底辺にこぶりな J 字文がつくのは、東の文様構成ではないだろう。下段の長方形区画文、渦巻文とともに、近畿以西の文様構成ではないかと想定している。滋賀県小川原遺跡や島根県佐太講武貝塚などにみられる三角形と J 字文の構図をもつ土器は、文様・器形ともに、九州地方の鐘崎式との関係を想起させる〔中村編95 図版63, 赤澤98 図4〕。今は結論を急ぐことは差し控えるが、東西の型式をひろく参照・比較しつつ、文様の系統について、詳細な検討を加えることを今後の課題としておきたい。

古代・中世の土地利用 病院構内一帯では、現在のところ古墳時代の遺跡は発見されておらず、奈良時代から平安時代中期までの遺構も、154地点の7世紀後半8世紀初頭の土坑〔五十川ほか89〕, 191地点の8世紀末の堅穴住居の可能性のある土坑, 10世紀の土坑〔浜崎ほか93〕, 155地点の10世紀ごろの井戸や土坑〔五十川ほか89〕, 39地点の平安中期の護岸〔京大埋文研81a〕が見つまっている程度であり、活動の痕跡は希薄である。今回の調査では、この時期の遺構はみつからない。平安中期に高野川系流路に対して築かれた護岸が示すように、病院構内の西半は依然として高野川の氾濫原に含まれており、東半も後背低地として不安定な土地柄であったことが、この時期の開発が活発でないことの大きな理由であろう。

さて、病院構内も含めてこの地周辺の開発が本格的に開始されるのは、平安時代後期、法勝寺の建立（1077年）に始まる六勝寺の造営以降のことである。六勝寺の造営とともに、白河南殿・北殿といった院の御所や公家の邸宅、諸寺院の建立が相次ぎ、現在の左京区岡崎から吉田にかけて、「京白河」と洛中と並び称される白河街区が展開した〔浜崎91〕。こうした街区の整備にともなって、病院構内でも人々が本格的な活動を始めていることは、12世紀以降の遺構や遺物が病院構内一帯で急激に増加するという既往の調査結果から明らかである〔京大埋文研81a, 浜崎84, 五十川ほか89, 浜崎ほか93〕。

白河街区の条坊地割については、いくつかの復原案があるが〔岡田79, 浜崎91など〕, 調査区付近は東西を今朱雀と仏所小路, 南北を中御門大路末と勘解由小路末に画された場所で、白河北殿の北東隣接地にあたるようである。今回の調査でみつかった中世の遺構には井戸や土器溜, 土坑, 溝などがあり、それらは出土遺物の年代からみて、12世紀後葉～13世紀前葉, 14世紀後半, 15世紀後半の3期に分けることができる。調査区のかかなりの部分が旧病棟基礎などによって破壊されており、井戸のように地中深く設けられた遺構が破壊をかわらうじて免れて検出されているという状況を考慮する必要があるけれども、12世紀前半, 14世紀前半, 15世紀前半, 16世紀の遺構はなく、これらの時期の遺物もほとんど出

土していない。存続期間が比較的短く、連続しない3時期の遺構群として理解できるのが本調査区検出の遺構群の特色であろう。また、瓦がほとんど出土していないこと、いずれの時期も井戸を中心とした遺構のありようから判断して、邸宅や寺社の中心部からは、はずれた地点であると理解する。

このような遺構群のうち、12世紀後葉～13世紀前葉は、白河街区の展開と関連づけておきたい。北に隣接する154・155・191地点で検出されたこうした時期の遺構群は、仁平元(1151)年創建の福勝院との関連で理解されている〔五十川ほか89、浜崎ほか93〕。ただし、これらは勘解由小路末の北側に展開する遺構群であり、本調査区に残された該期の遺構群が福勝院に直接関連する可能性は少ないと考えている。白河北殿の北隣接地にあたる39地点では、この時期が遺構の形成のもっとも活発な時期となっており、それは院政を支えた勢力の拡大として解釈されている〔京大埋文研81a〕。白河北殿の北東隣接地にあたる本調査区の遺構群もこうした動向のなかで理解できるだろう。

14世紀後半、15世紀後半の遺構群の性格についてはどのようにみるべきであろうか。14世紀は院政を支えた旧勢力にかわって、吉田社や聖護院といった新興勢力によって鴨東白川の地が再編されてゆく時代である。聖護院の鎮守社である熊野社は、14世紀後半には、その四至を崇徳院と大吉祥院敷地とを除く「近衛以南、大炊御門以北、今辻子以西、至于河原」とされており〔福山77〕、この頃、伸長著しかった吉田社と近衛大路を境に社領を接していた。調査区一帯は、熊野社の社領に含まれることになる。中世後半の遺構は、熊野社との関連をひとまず想定しておき、周辺地域の調査の進展を待って再検討したい。

近世の土地利用 病院構内では、15世紀中頃を境に遺物量が急激に減少し、16世紀から17世紀にかけての遺構・遺物は、ほとんど皆無に等しい状況となる。ひろく京都大学吉田キャンパス一帯をみても同様の傾向にあり、この地一帯が貴族の邸宅や寺社地から耕作地へと変転していった状況を示すものとみられる。

こうした土地利用の変遷と対比したとき、17世紀の遺物を大量に含んで埋積している大溝(S D 4～6)がA G 20区東調査区で検出されたことは注目に値しよう。南北に併行してはしるS D 4とS D 5は、北に隣接する191地点で検出されていたS D 22・23と一連の大溝である(図42)。今回の調査によって、S D 4は70m以上の長さをもつこと、S D 5は南北が50m前後で、南端で東に折れることが判明した。東に折れたS D 5は、15mほど伸びて立ち上がっている。S D 4から派生して東へ伸びるS D 6もほぼ同じ地点で切れており、ここに入出口を想定することもできる。なお、S D 4の南端は調査区外へと続い

ているが、A F 20区では検出されなかった。ここまでは大溝が伸びていないと想定できるが、調査区の位置関係から、A F 20区の東側をはしる可能性もあるので、周辺地区の調査結果を待って判断したい。

191地点でこれらの溝を検出したさいには、18世紀後半の遺物を大量に含んでいたことから、18世紀代と判断した。そして、現在は東大路を隔てて東の聖護院西町に所在する照臨院という浄土宗律院が明治30年以前はA G 20区東調査区付近にあり、京都帝国大学附属病院の開設にともない現在地に移転していること、その開基が享保5（1720）年であることから、これらの大溝が照臨院に関連する可能性を考えた〔浜崎ほか93〕。

今回検出した部分では、18世紀代の遺物は少なく17世紀の遺物が中心となって埋積していた。とくにS D 4の北半は、17世紀前半の遺物を多量に含んでいた。これらの溝は、ある時期にいきなり埋まったとみるよりも、溝としての機能を失ったのち、廃棄場などとして利用されながら、17～18世紀という長い期間をかけて埋まっていったと理解するのが自然であるように思われる。溝の掘削の時期を特定することは難しいが、17世紀前半の遺物を含んで埋積しているので、それ以前ではあるだろう。16世紀代の遺物は、溝中とはもとより、調査区全体からもほとんど出土していないので、16世紀に遡るとは考えにくく、17世紀の早い段階と考えているが、検討課題としておきたい。

このように考えると、これらの溝を照臨院と直接関係させるのは、年代的に無理が生じる。照臨院の開基は上述したように18世紀前葉のことであり、この段階では溝は機能を失っているからである。照臨院は、僧霊潭が荒廃していた今日庵なる寺院に移り住んで1720年に再興させたという由緒をもっている〔碓井編15〕。今日庵の実態については不明であるが、これらの溝は照臨院の前身である今日庵に関連すると考え、寺院や邸宅を圍繞する溝と想定しておく。

また、東調査区の南東部では、近世の多数の井戸がみついている。これらは、18世紀前半までの遺物で埋まっているもの（S E 3・7～9）と19世紀の遺物を含んでいるもの（S E 2・5・6）にわけることができる。前者は今日庵、後者は照臨院に関連する井戸と考えることが可能であろう。

一方、A F 20区では、18世紀に埋め立てられた池や流路が検出され、18～19世紀の大量の遺物がみついている。池は、西に隣接する141地点で検出した池の東端の部分にあたるものである〔浜崎・宮本87〕。陸地測量部によって明治20（1887）年に作成された仮製二万分一地形図を見ると、熊野社の北方は春日上通の北側、今回の調査区を含む病院構内

東南部あたりまで、聖護院村の集落が近代初頭には展開していたことがわかる。上述した照臨院以外に、現在、小路をはさんで照臨院の北に所在する梅瑞庵という曹洞寺院、現在は退転している有門院という天台寺院も、明治30年京都大学の敷地になるにあたって、東側の地に移転している〔碓井編15〕。近世後半から大学が病院敷地として買収する明治30年まで、調査区付近は聖護院村の町並みの北のはずれにあたり、寺院や住宅が散在する景観を呈していたのであろう。

蓮 月 焼 大田垣蓮月は、寛政3（1791）年に生まれ、明治8（1875）年85歳で没した幕末の歌人である。幼名を誠（のぶ）といい、33歳で出家して尼となり蓮月という法名を授けられた。生活の糧とするために、自詠の和歌を釘彫りした手づくねの茶器を製作したところ、当時、文人墨客のあいだに流行していた煎茶趣味に一致し、蓮月焼として名声を博した〔杉本76、徳田ほか82、京都府立総合資料館編84〕。

この蓮月焼が、京都大学構内では141地点の調査で出土して注目されたが〔浜崎・宮本87〕、今回の調査でもA G 20区東調査区の南辺で多量に出土した。141地点では急須・湯瓶・徳利・鉢がみられた。今回は急須・湯瓶・煎茶椀・皿・蓋物・鉢・茶托・香合・壺形・涼炉・火炉がみられ、施釉陶器、焼き締め陶器があるなど、多種多彩である。これらはすべて、焼き損ない品とみてよいものであった。蓮月は、栗田や清水の窯元に依頼して焼成をおこなっているの、焼き上がった作品をすべて持ち帰って選別をおこなったのであろう。そして、選に漏れた失敗作が調査区付近に廃棄されたものと考えられる。

蓮月が聖護院村の北辺、現在の病院構内東南あたりに居住したのは安政～文久年間で、蓮月60歳代の後半から70歳代前半のころのことである。Ⅱ418～Ⅱ421の香合は、安政2（1855）年、蓮月65歳ごろの作品として伝わる亀香合に酷似し、これには富岡鉄斎による、聖護院村で製作したという箱書がある〔京都府立総合資料館編84 p.8〕。

蓮月が陶器作りを始めるのは40歳代のことである。以来、85歳で没する直前まで作陶しており、多数の作品が後世に伝わっている。今回の出土資料は、焼き損ない品ではあるものの、聖護院村居住時代に限定できる一括資料であり、作風の変遷などを明らかにするうえで、重要な資料になるものと理解する。

なお、中・近世の遺物については難波洋三氏（京都国立博物館）、梅川光隆氏、蓮月焼については、守屋雅史氏（大阪市立美術館）、徳田光圓氏（西賀茂神光院）、埴堀に関しては、内田俊秀氏（京都造形芸術大学）、五十川伸矢氏（京都橘女子大学）から、有益なご教示をいただきました。末尾ながら、感謝申し上げます。